
Filia 友との約束 改訂版

如月 充

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F i l i a 友との約束 改訂版

【Nコード】

N 3 3 2 0 X

【作者名】

如月 充

【あらすじ】

魔法使いが極少数しか存在しない世界アルセウス。その中でも炎・水・風・土の4属性の内一つしか属性が使えない者たちが4人存在する。その者たちをエレメントと呼ぶ。そのエレメントの1人である主人公が世界の運命へと大きく関わっていくこととなる。人々が進むのは、世界の再生か破滅か・・・

プロローグ(前書き)

2011/11/6(日) 加筆修正

プロローグ

アルセウス大陸に存在する国家、

エリピオ

パシニイデイ

ウィルド

ワイル

の4カ国が存在していた。しかし、炎・水・風・土の4属性の1つしか使えないエレメントと呼ばれる魔法使い（マギシア）4人たちの内2人の死亡によりウィルドとワイルの2カ国が既に地図から消え既に滅んでいる。

そして、今も存在する1つパシニイデイのプロシウス村。かつて、美しい川・森の自然に囲まれ貧しいながらも人々からは笑顔が消えなかった村が今は2人以外の人影は消え、炎が周りを照らしている。村を炎に囲まれながらも、中央で2人の人影は向かい合い1人は右手に持っている剣をもう一人の方へと剣先を向けている。それをもう一人は右手に持った剣の剣先を地面に向けたまま視線だけを、剣を向けてくる人へと向けている。

「ネロ！ 平和への道を何故邪魔をする！ 俺たち2人が死ねば世界は平和になるんだぞ！？」

「ああ、本当に平和になるなら俺の命ぐらいやるさ！ バルク。だがな、たかが伝承だぞ！？ それに今の世界をしてみる、カtasとセオス陛下が亡くなり、ウィルドとワイルがどうなったか知っているだろ？！」

「ああ、判っている。だがな平和への道だ、これぐらいの犠牲は仕方がない！」

「これぐらい？ これ程の犠牲をだして何が平和だ！ 俺達が2人

死ねば、この世界は滅ぶぞ！」

「滅ぶ？……いや、滅ぶのは俺達が生きていた場合だ！俺たち2人が死ねば世界は生まれ変わり、平和になるんだ！」

バルクは、そこまで言い終わるとネロに向かって走り出し、剣を左側へと振り下ろす。

それを、ネロは右半身を傾け避ける。がしかし、すぐさまネロの首を狙った剣先が振り上げられる。

その攻撃は、後ろへ飛び避ける。

こちらの話も聞かず、未だにこちらに攻撃を続けるバルクに向かって叫び続ける。

「やめろ、バルク！もし俺たちが死んで世界が生まれ変わっても、平和にはならない！人は争う愚かな生物だ！」

「だから、どうした!？」

バルクは、左手を振り上げる。すると、何も無い空中からいきなり炎が出現しネロの方に向かってくる。

その炎に対しネロは、左手を水平に薙ぐ。すると、こちらも同じく何も無い空中から水の壁が現れ、向かってくる炎を防ぐ。そのため水蒸気が発生し視界が悪くなる。ネロは何処からでも来られても良いように周囲を警戒する。

周囲を警戒していると、左に気配を感じ体を左へ向け剣を正面に構える。すると、飛び上がり剣を振り下ろしてくるバルクの姿を確認し、振り下ろされた剣を剣で防ぐ。

話も聞かず、こちらを殺すためだけに剣を振ってくる。変わった、前はこんなに人の話を聞かない人間じゃなかった。バルクを変えた原因は、自分もあるのではないかと考え続ける。

そうであっても、そうでもなかったとしてもバルクを止めて、この世界の終わりを見守らなければいけない。そう思って、止めるため

に攻勢に出ようとする。

「ネロ、そろそろ最後としよう」

こちらが、攻勢に出る前にバルクが更に攻めてくる。その一撃一撃の攻撃は、気持ちに乗っているためか鋭く重い。そのため、こちらから攻める事が出来ず攻撃を防ぐので精一杯だ。

ネロはバルクの激しい攻撃を防ぎ鎧迫り合いを続ける。バルクは防戦一方ではあるが、自分の攻撃を防ぐネロの防御を崩すため、空いている左手の掌にボール状の炎が出現させてくる。そして、その炎をネロに向かつて突き出す。その攻撃に気付き、ネロはその炎に対し狙われている右横腹周辺に水の膜を作り炎の攻撃は防ぐ。が突きの反動は殺せず吹き飛ばされる。

ネロは、吹き飛ばされる瞬間に攻撃手段を1つ封じる為に矢じりの形をした水を精製しバルクの右肩を狙って放つ。

「ぐっ」

ネロは、吹き飛ばされ地面を転がるがすぐに立ち上がりバルクを視界に捉える。だが、思っていたよりもバルクが近く体が固まる。

このままでは、殺^やられる。そう思いながらも体が動かず膝をつき立ち上がった状態でバルクと体が重なる。

右肩をやられながらも剣を手放さず左手で剣の柄に添え、支えながら中央へ構えネロの心臓へ突き刺してくる。刺し貫かれているのを、心臓を貫く痛み^に熱で理解する。

「ぐあー！」

バルクが、心臓を貫かれ体に力が入らないネロの右手を掴んでくる

のを感じる。バルクが、やろうとしている行動を理解して防ごうと右手に力を入れようとす。しかし、死に近づく体では力が入らずバルクの好きに動かされる。

それに、言葉を掠れさせながらも必死で行動を止めさせようと言いつける。だが、バルクは耳を貸さずネロの右手に剣を握らせてくる。そのまま、ネロの右手を支えにして剣先をバルクは自分へと向けさせる。

「……………」

バルクは何かを言う。だが、死にかけのネロには上手く聞き取ることが出来なかった。

何かを言ったバルクは、そのまま自らネロの持つ剣へと心臓を刺していく。

「ぐう……………そう……………だネロ……………これで良い……………これで世界は……………」
「無駄……………だ……………バルク……………人は過ちを……………くり……………かえす……………」

そして、2人は互いに寄りかかり地面へと倒れる。

ネロとバルクが、息を引き取ってから10分。2人が倒れた為残っていた、エリピオとパシニイデイが崩壊し其処は光が届かぬ闇の世界と化していた。そこに、1人の長身で黒の髪をした男性が急にその世界に現れた。

ただ、その男は立ち尽くすのみ。その胸の中では、昔自分が存在していた世界で過ごした友との約束を思い出していた。

あの頃の自分は疲れていた、同じ人間同士でありながら戦争を繰り返す。平和とどの人間も叫びながら戦争を繰り返す。争いが終わっ

ても次の争いが起こる。その先に求めているもの等本当はないかのように。

だが、友は言う。争いの先に平和があると……。

「やはり、人は同じ過ちを繰り返す……本当に人は争いの先に平和を見出す事が出来るのかバイアス？　だが、バイアスこれで最後だ……これで」

既に、何万・何千万回も繰り返した世界の再生。だが、もう疲れたんだ。同じ事を繰り返す人々の歴史に、もう見守ることさえも。

「……………」

謎の男は何かを呟くと最初から居なかったかの様に消え、闇と化していた世界に光が広がっていき新たな世界の時が動き始めた。

プロローグ（後書き）

お久しぶりです、如月充です。

ようやく、改訂版の更新を始めること出来ました。

今度こそ、ちゃんと完結まで持つていくように頑張っていきたいと思えます。

改めて、私の作品「Filia 友との約束 改訂版」をよろしく
願います。

感想・誤字脱字などお待ちしております

第1話(前書き)

2011/11/08 加筆修正

第1話

4属性である【炎】・【水】・【風】・【土】それぞれ1属性しか使えない魔法マジック使い同士の力によって滅ぶ時、混沌なる世界から脱し新たなる世界へと生まれ変わる。

そんな伝承が残るアルセウス大陸南東に位置するパシニイディ。

その国内で、南西に位置するプロシウス村。そこから2キロメートル程東に離れた森で、青年が剣を右手に持ち、モンスター魔物たちを狩っていた。

身長175センチほど、濁った緑色の麻で織られた服、ズボンも濁った白を着ていて髪の色が水色で、前髪が長く右目が隠され後ろは肩に届かない長さ。

17歳・18歳ぐらいの青年ネロ・エピシミアは周囲の気配を探る森の中へ入って2時間。マンドレイク、コボルトを狩り様々な材料を回収する。更に、襲ってくるゴブリン、オークも倒しているが1番の目的である魔物を見つけられずにいた。

そんな2時間を森で彷徨い、そろそろ別の場所で狩りをしているバルクと1度合流するかと思っていると、右の方で何かが歩いている気配を感じた。ちょうど良いし、この気配の持ち主を確認して材料を回収できそうな魔物なら倒してバルクと合流しようと考え、気配のする方へと向かう。

そして、木々の隙間を抜けると熊の姿をした魔物・モンスターベアルドが後ろ姿を見せながら歩いている。その姿を確認すると、漸く見つけたと思わず知らずの内に安堵の息を吐く。

ここで逃げられたら漸く見つけた苦労が水の泡と帰す。ネロはそう考えながら、ベアルドに気付かれないように息を潜めながら一歩一歩音を立てないよう慎重にその後ろ姿へと近づいて行く。

ネロが、30メートル程まで近づくと、1本の木の前で歩みを止め周りを見渡し何かを確認する動きを見せる。そして、確認を終えたのか目の前の木の幹に印を付け始めた。

その行動を確認し、今の内にと一気にベアルドに向かって走り出す。しかし、あと数メートルという所でベアルドがこちらの足音に気付き振り向く。

「ちっ！」

その事に舌打ちをしながらも走り続け、ネロはベアルドに向かって飛びあがり首を狙って右手に持った剣を左へ振り抜く。だが、ネロのその攻撃はベアルドの左の鉤爪によって防がれネロは後ろに下がるしかなかった。

このぐらいの強さの魔物ぐらい速く倒したい。その逆に、焦ればしなくても良い怪我をする。という思いもある。そして、村で待っている妹の事を考える。

自分が怪我をすれば、妹のミウに心配を掛けるだろう。それに、亡くなる間際に母に頼まれた約束も守れなくなるかも知れない。やはり、時間は掛ろうとも攻撃を喰らわず、少しずつダメージを与えて弱らせ倒そう。

ネロは、ベアルドに向かって走り出す。馬鹿正直にベアルドの正面に向かって走って走ってベアルドの攻撃の範囲へと入る。すると、こちらを右手を振り上げて鉤爪で攻撃してくるが頭を低くして避ける。

その攻撃を避ける時、体を回転させ横腹に攻撃を喰らわせる。

「ギャアアアア！」

攻撃を喰らい痛みの為、怒りの為、もしくはその両方の為かベアルドは叫び声を上げる。しかし、ベアルドの叫び声を気にする事もなく今のやり方に手応えを感じたネロは、攻撃を続ける。

ただ、同じ攻撃を繰り返す。人に害を為す魔物に。人の生活に彩りを与える魔物に。憎しみと慈しみという相反する念を抱きながら。何十回同じ攻撃を繰り返しただろう。瀕死の状態で、歩くのもやつと。という状態でありながらもベアルドは諦めるという事を知らないのか手を振り上げる。

何故、諦めない。それほどの怪我だ、もう辛いだけだろう。何故、楽になることを選ばない。何を期待しているんだ……！

ベアルドは手を振り下ろしてくる。それを、後ろに少し下がり手が振り下ろされると、その手を台にして飛び上がる。そして、こちらを見上げてくるベアルドの頭部を狙い突き刺す。

「ガ、ギヤア……」

その攻撃が止めとなり、ベアルドは後ろに倒れていく。その光景を見ながら、いつも思う。こいつら魔物は、何故辛いのにそれでも戦い続けるんだ？ 生きたいからか？ なら何故逃げようとしない。

何故、俺はこんな事を考える……所詮相手は魔物だぞ。

そんな考えても答えの出ない事を考え続けていたため、肩を叩かれるまで誰かがいる事に気づかず慌てて後ろを振り向く。

「俺だ、俺！」

ネロの慌てて振り向く様子に、バルクは苦笑してネロが倒したばかりのベアルドをネロの肩越しに見る。見て、そのまま横を通り過ぎベアルドの脇に膝立ちとなり何かを調べていく。

「バルク……すまん。どんな感じだ？」

「今、見てるよ。それより、木の幹にでも腰掛けて少し休んでるよ」

ネロにバルクと呼ばれた、身長180センチ程ネロと同じ色の服と

ズボンを着て、髪の色が赤で短髪の青年だ。

バルクに言われた通り、近くにある木の幹に腰掛けて自分が倒したベアルドを見る。血に汚れて見にくいだが、戦闘の流れと今までの経験から恐らく商品として売れる状態ではないだろうと推測する。今までも、倒したとしても皮に傷が付き過ぎて商品として売れない物だった。

だから、バルクに言われる事は予想がつく。

そして、漸く傷の度合いを調べ終わったのかバルクは顔をこちらへと向けてくる。それに、言われる事は予想をつけているがもしかしたらという思いも捨てることが出来ずに緊張を高めてしまう。

「頑張ったじゃないか。体下半分それに両腕は無理だろうけど、それ以外の部分は大丈夫そうだけ」

そう言ったバルクは笑顔を浮かべている。その笑顔に、こちらも同じく笑顔を浮かべる。バルクの言葉で少しは自分の剣の腕も上がったと自信を持つことが出来る。だけど、これで満足したら駄目だ、この程度の腕じゃミウを守るなんて出来やしない。そう考えてから、ベアルドの皮を剥ぐ準備のためナイフを取り出したバルクの横に立つ。

残念ながら、まだベアルドの皮を上手く剥ぐ事の出来ないネロはバルクが剥ぎ取った皮を受け取り、ベアルドの皮で作った袋に入れていく。暫くすると全ての皮を剥ぎ終わり肉を切り取る作業に移る。ネロもその作業には参加し、皮を入れた袋とは別の袋の中へと切り取った肉を2人は次々と入れていく。

全ての作業を終えると、剣やナイフに付いた血糊を布で拭き取り鞘に戻し立ち上がる。

「よし、これだけ集めれば今日は充分だろ。帰るか」

「ああ、そうだな。それに、そろそろ戻らないと村に着く前に暗く

なりそうだしな」

村人皆が、心配性で夕食時に子供1人でも帰ってこないと村人皆で探しに行こうとする。だから、今ネロが言った言葉にバルクと2人で嫌な事を思い出す。

小さい頃、まだ母さんが生きていた頃のある日。バルクと2人で、西にある村から少し離れた場所の広場で遊んでいて、気づくと夕日が沈もうとしていた。それから、親を心配させているとも知らずにゆっくりと色々な会話をしながら帰っていると村に着いたのは夕食時を、30分ぐらい過ぎたぐらいだった。

しかし、村の入り口を潜ると何故か村全体が騒がしくその様子に疑問に思いながらも歩いていった。その時、2人に気付いた村人の1人が2人が戻ってきた事を村全体に届くような大声で叫ぶ。すると、村人が集まってきた全員が2人に言葉を掛けながら無事を確かめるように抱きしめられた記憶を思い出していた。

昔ならまだ良いが、18になる青年が村人皆に抱きしめられるのは耐えられない。しかも、それをミウに見られると考えると、頭から煙が出そうなくらい恥ずかしくなってきた。

そうならない為に、2人は急いで袋を背負い森の入口のある方向へと向かっていく。

第1話（後書き）

2011年10月16日、加筆修正

感想・誤字脱字・しつ質問などお待ちしております

第2話(前書き)

2011/11/08 加筆修正

第2話

狩りを終え、森の入り口を目指し30分。漸く森の入口に着いた。そのまま、バルクと会話をする事もなくプロシウス村のある西へと向かう。

ネロは、歩きながら先のベアルドの戦闘を振りかえる。

さっきの戦いだけなら、結構手応えがあった気がする。だから時間を気にしなければ無傷で倒す事も出来るだろう。けど、もっと強くなりたい。何かを倒すためじゃなく大切な人を守る強さが欲しい。でも、父さんが死んだ時の、あの時の気持ちだけはさせたくない。もう2度としたくない。

あの時、村に魔物の集団が襲ってきた時。一匹一匹は、大した強さもなく普通なら、苦勞する事もなく倒す事ができたはずだった。唯、数が尋常じゃない数というであっただけ。

それでも、父さんたちは子供たちを守るために武器を手に取り立ち向かっていった。しかし、数が多くとても防ぎきることなど不可能であった。村の北、入り口付近で守っていた父さん達。

その防衛を突破し、村の中へと入ってくる魔物たち。そして、ネロは母の言葉を見無視して家の外に出て父の姿を見ようと橋のある中央部で、父達の戦う姿を見ていた。

そのネロの姿に気付いた魔物の一匹であるベアルドがゆっくりとした足取りでこちらに向かってくる。子供であったネロは、その姿に恐怖し逃げようと後ずさるが何か足に引掛けてしまい後ろに転んでしまう。

転んだ状態で、後ろに下がろうと手足を動かし続ける。しかし気づけば、ベアルドが目の前で右手を振り上げてこちらを見ていた。あまりの恐怖で、ベアルドの姿を見る事が出来ず目を瞑り下を向く。子供ながら覚悟した衝撃が何時まで経っても襲って来ず、恐る恐る

目を開き上を向く。そして、ネロの目に映ったのはベアルドではなく、ネロを庇いベアルドの鉤爪を腹から貫通させている自分の父であった。

ベアルドは、父の腹から右手を抜く。父は、支えを失い前へ倒れかけるが最後の気力を振り絞るかのようにネロの頬に左手を添える。

「良かったあ……ごほっ！ ……間に、あった」

父は、口から血を溢れさせながらも笑顔を浮かべてネロに覆い被さるように倒れてくる。その父の様子に、信じられないものを見る様な表情を浮かべ父に呼び掛ける。

だが、どんなに呼びかけても反応しない父に嫌な考えが過り^{よき}涙を浮かべ、いやいやと首を横に振る。そして、泣き叫び続ける。父の死を否定するように。

その後の記憶がネロには、なかった。気づけば自分のベッドに横になり朝を迎えたのだった。

それから、月日が経ち村も復興することが出来た。それに、父が自分の命を犠牲にして守ってくれたおかげで、今もネロは生きている。だけど、守られた側の自分としては、自分があの場合にいた所為で父は亡くなった。あの場合にいなければ父は今も生きてたかもしれないのにも思ってしまう。

守られた側は、後悔しかない。だから、そういう場面になっても自らの命を犠牲にせずに大切な人を守る事が出来る。それが、大事だと思う。

少し憂鬱になりながらも意識を外に戻すと、既にプロシウス村の入口が目の前だった。その事に、内心かなり驚いていながらも何事もなにかの様に装い入り口を潜る。

2人が潜ると2人に気付いた村人たちが元気な声で声を掛けてくる。

「おかえり〜！ネロ、バルク」

「おつかれさん！」

「怪我はないかい？」

「狩りの成果はどうだい？」

その村人たちの声に、1つ1つ返事をしながらネロとバルクは村の奥へと進んでいく。

ネロは、村の様子を見る。村人の住む家は、火が灯されその火の光が外に漏れ、薄暗く木目を浮かべさせている。そんな家の隣に、大きさは別々だが畑を耕しており、野菜の葉が姿を見せている畑と土だけの畑が存在している。

ネロの家の畑は、種を植えたばかりの為土だけの寂しい姿をしている。そして、何故か村を二分するかの様に、中央には窪みが出来ておりそこも畑として機能している。そして、その窪みの上には橋が掛けられている。18年、この村で過ごしているがこの窪みの畑の存在が分からない。今は村全体の共同畑として使っているからネロも世話にはなっているんだが……。

そんな村の東にひと際大きな家が建っている。そこが、この村の村長で今回の狩りの成果を渡しに行く場所の為、2人は村長の家の扉の前に立ちノックをして村長を呼ぶ。

ノックをしてから少し経つと、扉が開けられ老人が笑顔を浮かべながら2人を見上げていた。

「おお！ネロにバルクかあ。さあさあ入りなさい」

その老人は、2人を確認すると手招きをし家の奥へと戻っていく。

「「おじゃまします、村長」」

ネロとバルクは、そう言ってから老人・村長の家へと上がり奥にある椅子へと向かう。

2人は、向かい同士に座り先に椅子へと座っていた村長へと視線を移す。

「村長、これが今日の成果です」

ネロが、そう村長に言い背負っていた革袋を机の上に置くとバルクも同じように革袋を置いた。

置かれた革袋を、村長は手元に寄せ中身を確認すると、独りでに頷く。

「ふむふむ、いつもすまないなあ2人とも。ざっと見た感じ今回の成果で充分数を揃えることが出来そうじゃからのお、明後日街へ出て加工品などを売りに行こうと思うんじゃがなあ、護衛として来てくれないかのお」

村長の言葉に、ネロは喜ぶ。漸く、初めて街へ行ける。この国の首都・パシニイディはとても美しい街並みと評判で、1度行ってみたかと思っていたところだった。それが、漸く叶う。それに、美しい街並みと評判じゃなくても自分たちの住んでいる国の首都なんだ。どんな人が住んでいるのか気になるじゃないか。

そして、2人は護衛の事を引き受けると村長の家を後にする。

第2話（後書き）

いつも読んでくださり有難うございます。

老人の話し方の表現の仕方ムズいなと感じましたね。その辺の表現が出来ている方が羨ましいです。

感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に感想板にお書きください

第3話(前書き)

2011/11/09 加筆修正

第3話

ネロとバルクの2人は、村長の家を出るとそれぞれの自宅へと戻り始める。中央の窪みを橋で渡ると、ネロとバルクは1度橋の前で止まり、別れの挨拶を交わす。

2人は、挨拶を交わすとネロはそのまま真っ直ぐ南へ、バルクは西へ家のある方向へと向かう。

ネロは、バルクと別れると真っ直ぐに妹のミウが待つ家へと向かう。ミウが作る食事を思いつつ、そういえば、最初は食べるのにも苦労する味だったのに今は村で1番だと思わせる味になったよなと思う。だけど、それも当り前か……ミウが母さんの代わりに台所に立つようになって8年も経つものだから。

扉の前に着き、扉を開ける。

「ただいまーミウ」

ネロは、扉を潜り声を掛けると奥から、バタバタと急ぐような音を出しながら左側にある2階へと続く階段からエプロンを左手に持ちながら女性が降りてくる。

「あつ、おかえり兄さん」

ミウからの返事にもう1度、ただいまと言い持っている剣を片付けるため、2階にある自分の部屋へ戻る。部屋へ戻ると、奥にある木で作られたベッドの横ある小タンスを支えにして剣を立て掛ける。そして、小箆笥の上の写真立てに入っている日焼けをして色が変わり始めている写真を見る。その写真は、右側には6歳頃のネロと、左側に4歳頃のミウが手を繋いで立ち、ネロの手を繋ぎ父が、ミウの手を母が繋ぎ中心に4人が立って写っている写真だった。

ネロは写真に手を這わせながら、母さん父さん俺もミウも無事に今日を終える事ができそうだよと思うとミウがいる1階へ戻るため部屋を出る。

1階へ降りると、ミウが食事を机に並べているところだった。並べるのを手伝うため、まだ台所にある皿を持ち机に並べていく。ミウが、それに気付くとお礼を言ってくるが、気にするなと返しておく。そして、並べ終わると2人は向かい合うように席に座り食事を始める。食事を始めると、ミウは今日ネロ達が狩りに行っている間にあった些細な出来事を笑顔で話していく。それをネロも笑顔を浮かべながら、黙って聞いていく。

そして、話を終えたのか今度は黙々と急ぐような感じで食事をしていく。

「おいおい、そんなに急ぐと詰まらせるぞ」

そんなミウの様子に、口を挿んでしまう。

「大丈夫、大丈夫」

と、気にした様子もなく食事を尚も続ける。そんなミウに、全くそんなに急いで食べる必要ないだと少し呆れながらも自分の食事を再開する。それから、特にミウが喉を詰まらせる様な事が起きる事もなく食事を終え皿を洗い片付ける。

片付けを、終わると2人はそれぞれの部屋に戻っていく。ネロは、部屋へ戻ると入ってすぐ右にあるタンスの前に立つ。

そして、服を着替えベッドに横になり、目を閉じる。

鳥の囀りの音で、ネロはベッドの中で目を開ける。横たえていた体を起こし、出かける為に服を着替え、ベッド横の小タンスに立てか

けている木刀の方を手に取り1階へと降りる。1階へと降りると既にミウは起きており食事の準備も終える所であり、後は机に並べる所であった。

「おはよう、ミウ。手伝うよ」

「あっ兄さん。おはよう……いいよ、もう終わるから。椅子に掛けてて」

そうミウに言われ、キッチンに向かう足を止めリビングへと足を向ける。そして、ミウも準備を終えリビングの席へと着く。ネロは、ミウが席へ着くと両手を合わせ食事に感謝の意を示す。

「いただきまーす」

ミウも両手を合わせ食事に感謝の意を示し、食事を始める。

「ねえ兄さん、今日何処かに行く予定ある？」

「ん？ ああ、後で北西外れの広場でバルクと剣の練習をしに行くけど」

「私もついて行っていい？」

「別に良いけど……来ても暇だと思っぞ」

「暇かどうか私が決める事だし、いいじゃん」

ミウの言葉に、苦笑を浮かべながら食事を再開する。ミウはネロの言葉に笑顔を浮かべ止めていた食事を再開する。2人は食事を終え食器を洗う。それから、ミウは出かける準備をネロは椅子近くに置いていた剣を手に取り広場に向かう為、外へ出る。

「それじゃ、ミウ。俺先に行ってるからな」

「はい」

ネ口はミウの言葉を受けながら、外への扉を潜る。そのまま、ネ口は北へ歩き村の入り口を通る。村の入り口を過ぎ北へ数分歩くと、分岐点に着く。その分岐点から北西へと向かう。それから更に数分歩いていると、目的地である広場へと着いた。

第3話（後書き）

感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に感想板にお書きください。

第4話（前書き）

2011/11/10 加筆修正

第4話

ネロは、広場を見渡す。広場といっても首都であるパシニイデイへ続く道を、少し外れた所に何故か1つだけある切り株の周辺を勝手に村人たちが呼んでいるだけだ。

どうやら、バルクはまだ来てないみたいで、剣を構え素振りを始める。

素振りをしながら、もっと強くなりたいと考える。今のままでは、まだ守りきる事なんて出来やしない。自分の身を守る事さえも思う。そのような事を思いつつも別の練習に切り替える。

一步踏み込み右上から左下へ振り抜き、即座に切り上げる。隙を作るべく切り上げた体勢のまま、相手の左足を狙い回し蹴りを放つ。しかし、それは失敗し相手に背中を見せたまま前へ転がり距離を取り、相手と向き合う。というイメージで練習をしていると、ようやくバルクが現れ後ろから声が掛かる。溜めていた息を抜き後ろへ振り向き手を上げ、挨拶を返す。

「よー、ネロ。待たせたな」

「気にするな、俺が早めに来ただけだ」

ネロが、そう言うとバルクは左手で頭を掻き、左腰にある木刀の柄へと手を添え、木刀を抜く。

「それじゃ、早速始めるか」

バルクはそう言うと、木刀を構え始める。それを見て、ネロも5メートル程距離を取り、木刀を構え直し思考を切り替える。

バルクは、構えを維持したままこちらの隙を窺ってくるため、こちらも中々動けずに隙を窺うことしかできずにいた。その状態に数分耐えていたが、ネロは我慢が出来ずに、バルクへと向かっていく。ネロは上段から振り下ろすが、それをバルクは少し後ろへ下がり余裕で避ける。

(ちい！ だけど、まだだ！)

避けられたのを確認するとネロは、更に前へと出て木刀を左から右へと薙ぐがそれもバルクは、剣を使うことによって防ぐ。攻撃を防がれ、ネロの空いている右横腹に蹴りが放たれ避ける事も出来ずに攻撃を食らってしまう。

数メートル吹き飛ばされたネロは顔を顰めながら、すぐに膝を地面に付きながらも起き上がりバルクがいるはずの方向へと顔を向ける。すると、追撃のためこちらに向かっていたバルクが、柄を両手で持ち木刀を振り下ろすところであった。それを、ネロは離さずに行っていた木刀を頭に翳す事によって防ごうとするが、両手で振り下ろされた勢いを殺すことが出来ずに、前へと体勢を崩してしまう。そこを逃さずにネロの首に木刀を突き付ける。

自分の首へと突き付けられている木刀を映して、ネロは四つん這いとなっていた体勢から、立ち上がり歯を噛締めバルクを見る。

「はあはあ……弱いな俺……」

これじゃ、守るなんて出来やしない。何の為に、剣を握っているのか分からなくなる。

「はあ……別にお前は弱くないって」

二人とも、上がっている息を落ち着かせるために立ちながら休む。ネロは、バルクに慰められながら視線を自分が握っている木刀へと移す。

木刀を見つめながら、考える。何故、勝てないのか。何故、負けるのか。何が間違っているのだろうか。と考え続ける。

自分の思考に嵌まって、どれくらい経ったのだろうか。ネロの耳に、ミウの声が届いた。

「兄さーん！ バルクさーん！」

その声で、ネロは思考の渦から抜け出し声が聞こえた方へと顔を向ける。そこには、右手を振りながらこちらへと歩いてくるミウの姿が映っていた。

そして、ミウはある程度距離が縮まると2人へと駆け寄ってきてバルク、ネロの順で見る。

「おはようございます！ バルクさん。もうぼろぼろじゃない、兄さん」

バルクには笑顔で挨拶をして、ネロに対しては呆れた声で言う。

それから、合流したミウをギャラリーに加えネロとバルクは剣の練習を再開する。何度も練習を繰り返し、ネロは何度も負けた。ネロが負ける度に、ミウは何か一言言ってくる。その一言に、ネロはやる気を出したり、落ち込んだりと繰り返し、バルクはそのやり取りを笑いながら見続けている。途中で、ミウが作っていたお弁当を昼食として食べた後も、練習を続けていた。

時間が夕方頃になると、ミウは夕ご飯の支度をしないといけないからと言って村へと帰った後も、しばらく2人は練習を続けていた。

「そろそろ時間も時間だし、次で最後にするか」

バルクの言葉にネロは頷き返し、木刀を構える。同じく、バルクも木刀を構えるとネロはいきなりバルクに向かって走り出し、木刀を突き出す。それを、バルクは体を縦にして避ける。ネロも、避けられると判っていたのかすぐに左へと振るう。しかし、その攻撃はしやがむ事によつて避けられてしまい体当たりを喰らいそうになったが、右へと飛ぶ事によつて避ける事に成功した。

そして、また2人も向き合い今度は同時に前へと出る。前へ出た2人は上段から右斜めへと振り下ろす。2人の木刀がぶつかり鏢迫り合いが行われる。

鏢迫り合いが行われ、5秒ほどするとバルクの体が右前へと進み受け流されてしまう。その為、ネロは体勢を崩され背中がガラ空きになつてしまう。そこを、バルクは木刀を振り下ろす。

体勢を崩され、バルクの振り下ろされた木刀を避ける事も出来ずにネロは攻撃を受けてしまう。

「ぐう！」

攻撃を受けて地面を転がった。ネロは攻撃を受けた場所に左手を添え、顔を顰めながら立ち上がりバルクへと向きなおる。

「くそっ！ ……一度も勝てなかった」

本当に、何の為に剣を握っているのか分からなくなる。一度もバルクに勝てない。練習をしている意味はあるのかと疑問を頭が過ぎる。

「次回がある。だから、今回の失敗を糧に次に活かせばいい」

バルクに、そう言われても素直にその言葉に頷く事が出来ずに、ネ

口は顔を俯け黙ってしまふ。そんなネロの姿に、バルクは苦笑し俯くネロへと近づき肩を叩く。

「ほら、ネロ。ミウちゃんも待ってるだろうし帰るぞ」

ネロは、そう言われ立ち上がる。バルクの後ろを歩き、自分が何故剣を握るのかを考えながら村へと帰る。

第4話（後書き）

遅くなり申し訳ございません。

次は、もう少し早く更新できるように頑張ります。

2011年10月19日 改訂

本当に申し訳ございません。ちゃんと確認したつもりでしたがまさか戦闘の途中だというのに、投稿した上に今日まで気付かず申し訳ございません。

こんな作者ですが、これからもよろしく願います。

感想・誤字脱字・ご質問などお待ちしております

第5話(前書き)

2011/11/10 加筆修正

第5話

村の帰途へ着きながら、バルクと何が違うんだろうと考える。

剣を握る理由？ バルクが剣を握っている理由は聞いたことはないけど。守りたいだけという理由じゃ駄目なのか。なら、ネロはどうすれば良いのか分からなくなる。

ネロには、守りたいという想いしかないというのに。

「……………口！ お……………ネ……………！」

考えの中に入っていたネロの耳の中にバルクの声が入ってきた。ハツと気付き周りを見渡しバルクを見る。すると、何故か心配そうな顔のバルクが写っていた。

「大丈夫か、ネロ？」

「あ……………ああ、大丈夫。どうかしたか？」

「どうかしたかって……………何度も呼んだのに返事しないし、振り向いたら俺を睨んでるし……………」

その言葉の最後に「本当に大丈夫か？」と言われ、ネロも「ああ、大丈夫だよ。只ちょっと考え事をしてただけだから」と答える。

そのネロの言葉に、一応納得したのかバルクは頷くと歩みを再開した。ネロは、その後ろ姿に声を掛ける。

「それで、何か話があったのか？」

「ああ、そうだったな」

ネロの言葉にバルクは苦笑した顔をこちらに向け言い、また顔を前へと向け話し出す。

「なあ……おまえって将来どうするか決めてるか？」

バルクに、そう言われネ口は怪訝な顔をしながら口を開く。

「いや……まだ決めてないけど……おまえは？」

「俺は、1年後軍隊に入るよ。入って、この国の皆を守る」

「……………」

「俺1人だけじゃ、限度があるかも知れない。それでも、守れる人たちもいる」

「……………すごいな。俺は、ミウや村の人を守れたらそれだけでいいと思っっているのに」

「ネ口、おまえも一緒に軍に入らないか？」

「……………バルク。俺は、軍に入るつもりはないよ。軍に入れば守る以外で、人を殺すことになるかもしれない。それだけは嫌だから」

「そうだとしても、それが守る事に繋がるんだ。それでも、入るつもりなのか？」

「それでもだよ……………俺は、ミウを守ることに以外に力を使っつもりはないよ」

「そうか、だとしてもお前の気持ちが変わるのを俺は待っているよ」

そうネ口は今の考えを言うと、バルクは一度歩みを止め顔は前を向いたまま一言言うと、また歩き出した。

ネ口もまた、バルクにつられて止めていた足を動かす。それから、15分程歩くと漸く村の入り口が見え入り口を潜るとネ口は、バルクと別れ家へと帰宅した。

「ミウー、帰ったぞ！」

家の扉を潜り声を掛ける。キッチンからミウがピンクのエプロンを

着け顔を出す。

「ただいまー、兄さん。お風呂沸いてるから、入ってねー！」

ミウは、そう言いキッチンへ顔を引つ込め料理の準備を再開し始める。その音を聞きながら風呂場がある方向へと向かう。

30分程、風呂に入る。風呂から上がると既に準備を終え料理を並べて待っていたミウに一言謝り、ミウの向かいの席へと座る。

ネロは、ミウと今日の事などを会話のネタにししながら40分程で食事を終え、食器を片づけ部屋へと戻り明日の為、もう寝る事にしベッドに横になる。

しかし、ふと今日の事を考える。

「（バルクが軍に入るつもりだったとは……だから、あいつは強いのか？ いや、そうだとしても俺はミウを守るために強くなればいい。それが、正しいはずだ。別に軍に入る事だけが、守る事じゃないはずだ）」

今日はもう寝るかと首を横に振り、考えを中断すると今度こそ本当に眠る為目を閉じる。暫らくするとネロから、寝息が聞こえてきた。

「……口……きて………い！」

眠っていると、突然誰かに呼ばれた気がしてネロは目を開ける。しかし、まだ寝ぼけている為か視界は暗く天井を良く見る事が出来なかった。そのため、ネロは目を擦りもう一度見るがやはり暗く上手く見る事が出来なかった。

そのため仕方なく、起き上がるため手をベッドにつく。しかし、返ってきた感触はベッドの柔らかい感触ではなく床に手をついた様な硬い感触だった。その事に、疑問を覚えながらもネロは立ち上がる

と視線の先に映る者に驚いてしまう。

視線の先には、スラツとした細身、ネロと同じ髪色で腰まである髪の毛がこの国では見たこともない服、詰め襟で上半身と下半身の境目がなく、下半身の左右は切れ目が入りその隙間から女性の美しい足が見えている。

その美しい足に、視線を吸い寄せられていたネロの耳に、忍び笑いが聞こえ顔を赤くしながら誤魔化すように女性に問う。

「えつと……あなたは？ それに、ここはどこ？」

「ふふつ。初めまして、ネロ。私は、ウンディーネ。ここは、あなたの心の中」

ウンディーネと紹介した女性が言った言葉が、よく理解出来ずその言葉を繰り返してしまふ。

「そう、ここはあなたの心の中。まだ形が定まっていない世界。だからこそ、色々な形に定まる可能性を秘めた世界。あなたは、これから様々な経験をする事でしょう。そして、あなたはその経験を元を目指すべき世界を作っていくなさい。その為に、まずは認識をしないなさい。その世界で住んでいるのは、貴方達だけではないという事を」

ネロは訳が判らずウンディーネの言葉を、最後まで聞いているとウンディーネは突然姿を消しネロの意識は途絶えた。

第5話（後書き）

やっと……5話を更新出来ました……。

自分が、情けないです。頑張るとか言いながら1週間近く経とうとしておりました。

こんな作者ですが、どんなに時間が掛かろうとも執筆は続けますので、どうか宜しく願います。

感想・誤字脱字・質問などお待ちしております。

第6話(前書き)

2011/11/10 加筆修正

第6話

鳥の囀りが聞こえネロは、目を覚ます。意識が朦朧としながらも、掠れた天井を見ながら夢の事を思いだす。

「（あれは夢だったのか……？ にしては夢だった気がしない。それに何だ？ この感覚は……。昨日までと空気が違う？）」

そう思いながら、横になっていて体を起こしベッドの縁ふちに腰かける。昨日までとの空気の違いに戸惑いながらも、街に出かける準備をしなければと思い立ち上がる。その時、服を収納している木製のタンスの方向へ顔を向けながら、視界に映る生物？

薄い緑色の体と目はボールの様に丸く三角の形をした耳。そんな姿をした生物は自由にネロの部屋を動き続けるに顔を顰めてしまう。

「何故、幼精アエラスが見える？」

ネロは、自分が言った言葉に驚いてしまう。何故、知らない言葉を知っているのか？ 何故、昨日まで映っていなかったアエラスが、映っているのか？ その原因に1つ思い当たる節があり口に出す。

「あの夢か……」

これが彼女、ウンディーネが言っていた、世界に住んでいるものが自分たちだけじゃないって言葉の意味か。

だから何か問題があるのか？ と自問しすぐに答えを出す。

まあ確かに、少し視界に映るモノに戸惑っているがそれもすぐに慣

れるだろうと考え、結果何も問題がないと考える。

そのまま、タンスの前へ行き服を着替える。着替え終わると、ベッド横に立て掛けている剣を腰に挿し1階へ降りる。

1階へ降りると、いつも通り既に起きて朝食の準備を終えテーブルに並べている姿のミウがいた。そして、そのミウに笑顔を浮かべながら朝の挨拶をして席へ着く。ミウも、並べ終わるとネ口の向かいの席へ座る。

「兄さん、帰ってくるの3日後だけ？」

「うん、3日後の8月18日だな」

「お土産期待してるからね！」

ミウにお土産を期待されると言われ、苦笑しながら頷く。その間も、アエラスが視界を横切ったり、ミウの服の中に潜り込んだり、アエラスの行動に視線が行かない様にするのに

これだけは、一生慣れそうにないな

と思いつながら。

そういえば、ふと考えてしまう。何故、ウンディーネはネ口の夢の中に現れた。現れた理由が何かあるはずだ。だけど、そう思い考えるが、幼精の名前に魔法に関する知識だけ。魔法については内心驚きながらも、後で試してみようと思いつながらも食事を続ける。

それから、食事を終え時間も迫っている事もあってネ口は食器の片付けをミウにお願いする。そのまま、席を立ち、村長の家へと向かう。

その途中で同じく村長の家へと向かっているバルクと橋で合流し、村長の家へ着く。そして、ネ口は扉をノックをして、村長が出てくるのをバルクと2人で待つ。待っている間、バルクと今日の事を話し合う。バルクと話し合い1分ぐらいして扉が開いた。

「すまんのお、待たせたのお。それじゃあ行くかのお」

出てきた村長にそう言われ、村長を先頭にして2人は村長の後ろについて行く。入り口に着くと、入り口前に、街へ売る物を載せた馬車に3人は乗り首都 パシニイデイ への道を走らせる。

第6話（後書き）

いつも、読んで頂いている皆様有難うございます。

楽しみにして頂いているでしょうか？ 残念ながら感想など無いので少し疑問に思いつながらも書いております。それでも、書き続けるつもりですが……。

それでも、時々他の方の作品の感想を見ながら羨ましいという気持ち胸の中に沸いてしまいます。

その時は、勝手にその方の様に面白い作品を書いてやる！ と思うようにしていますが。

すみません、愚痴を聞かせてしまいました。

これからも、よろしく願います。

感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に、感想板にお書きください。

第7話

朝方に、ネロ、バルク、村長3人を乗せた馬車が、夕陽を背景に漸く街の入り口へと着く。馬車は、行き交う人々に気をつけながら街の中へ入り目的の場所へと目指す。

ネロは、初めて見る街　行き交う人々は自分たちよりも上質な服。建物は木造ではなく煉瓦で建てられ立派な街並み　にキヨロキヨロと周りを見渡す。

そんなネロの様子に、ため息をつき右手で頭を掻きバルクはネロを注意した。

「ネロ……頼むからそんなにキヨロキヨロするな。恥ずかしいだろ

……」

「いや……でもよお……」

「でもよお……じゃない！　今日はベアルドの皮とか売り終わったら街に泊まって明日の昼過ぎには、街を出る。だけど、昼までは自由なんだ。気になってる事とかは明日で良いだろ」

ネロとバルクが会話をしている間も馬車は、道を進み噴水のある中央広場へと着き、西側にある商業区へと進む　北へ行けば、王宮。東へ行けば、居住区。南、街の入り口

商業区を進んでいると、馬車はあるお店の前で止まり村長が馬車から降りる。ネロ達には降りる前に、

「すぐに戻ってくるから、待ってなさい」

と声を掛けられネロ達は、村長が戻ってくるのを馬車で待つ事になった。

村長が、店に入ってから2分程経つと店の者と思われる男を引き連れ村長が店から出てくる。そのまま、村長は馬車へ乗りこみ、男は誘導しながら少し遠回りをして先程の店の裏側へと着いた。

それから、店の男は中へと戻る。村長は、馬車を降りると持つてきたベアルドの皮などを店の中へと運ぶ様にネ口とバルクにお願いすると店の中へと入っていった。

ネ口とバルクは2人で協力し数回、馬車と店の中を往復し荷物を運び終える。荷物を運び終えると、やることもなく2人は店の中を見る。

店の壁には、ガウン、ケープ、パンドラ、オー・ド・シヨース、バド・シヨース等の衣類、それにネックレス等のアクセサリも置いてあるお店であった。

それを物珍しくネ口は、見ながら隅々まで店を見回る。見回っていると、あるペンダントが目についた。

それは、銀が使われ装飾品の形は盾、盾の中央下部分に剣の形となっており表面には、ライオンが描かれている。

そのペンダントに魅入っていると、後ろから声を掛けられ振り向く。そこには、話を終えたのか店の男の人が笑顔で立っていた。

「そのペンダントが気に入ったのかい？」

「えっ……？ ええ、まあ」

ネ口は、その質問に怪訝な表情になり少し戸惑いながらも、気に入っていたのは本当の事だったので正直に答える。すると、店の男は更に笑顔を深め頷き続ける。頷き続けて15秒程、漸く頷くのを止めてネ口に先程のペンダントをネ口の右手に手渡す。

「えっ？」

手渡されたペンダントを、茫然と見つめ戸惑いの嵐が頭を通り過ぎると怪訝な表情で店の男を見続ける。

「何故？ って顔をしているね。そのペンダントは君にあげるよ。」

それに、これも」

未だに、店の男が言っている意味をつまく解釈出来ずにいるネロに男は1度背を向ける。そして、直ぐにネロに向き直りネロの左手を勝手に開き、その上にまた何かを載せる。

載せられた物をネロは見る。そこには、先程のペンダントと同じ銀が使われており、装飾品の形は剣とシンプルな物があった。

「実はね、その盾の物とペアになっていてね。剣の物は紐を取り外す事が出来る様になってるんだよ。んで、外した剣は盾の裏側に鞘がついているから鞘に入れる事もできる。だから、その2つは君にあげるよ」

「いやっ!?!? でもお金があ!?!?」

ネロは、漸く男が言っている意味を理解し慌てて2つのペンダントを返そうとする。

「お金の事は気にしなくていい。だから、これは返さなくて大丈夫だから」

「いやあ……あのお……でもお」

男の人に何度も返さなくて良いと言われるが、納得できる訳が無く困った表情をしながらペンダントを持っている両手と男に視線を何度も彷徨わせる。

そのネロの姿に、男は苦笑いし右手で頭を掻く。

「本当に返さなくて大丈夫だから。君たちの村にはいつも良いモノを入れてもらっているし、そのお礼みたいなものと考えてもらったらいから」

「……わかりました。有難う御座います」

ネロは、男の言葉に渋々納得しペンダント2つを受け取る。剣のペンダントはそのまま自分に掛け、盾はミウのプレゼントにしようと思ひポケットの中へと入れる。

そのまま、馬車がある裏口へと向かおうとする。しかし、男から声を掛けられ男へと振り向く。

「そういえば、君には名乗っていなかったね。私は、この店の店長をしているピステイ・ポリティスだ」

「ネロ・エピシミアです。本当に有難う御座いました」

お辞儀をしながら、もう一度お礼の言葉を口にし馬車へと向かう。店の外へと出ると、既に夜となっていてバルクと村長は馬車へと乗り込み、ネロを待っていた。

ネロは、2人に遅くなった事を謝り馬車へと乗り込む。そして、馬車を1度街の外へ止める為に、外へと向かう。

既に、夜の為歩いている人々がいない為、来た道を10分程で街の外へとつき馬車を止め3人は再び宿へ向かう為、商業区へ向かう。3人は宿へ着くと、部屋を取り直ぐにベッドへと横になった。

第7話（後書き）

感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。感想板な
どに、お気軽にお書きください。

第8話（前書き）

2011/11/10 加筆修正

第8話

パシニイデイの宿で一夜をを過ごしたネ口達は、普段の6時より遅めの8時に起き宿を後にする。その宿の前で、3人は街の入り口に12時集合と約束し1度別れる。

バルクと村長の2人と宿の前で別れ、ネ口は街を1人で探索を始めた。

中央広場へ向かうため、東へと歩く。歩きながら、やはり朝早いため周りの店は開いておらず、商業区に勤めている人々とすれ違う。すれ違う人々は、楽しそうな会話をしている人、下を向き地面を見ながら歩く者、急ぎ走っている者、色々な人を見る。そんな人を見ながら都会は、大変なんだろうか？ と思う。

村なら、確かに収穫の時期とかは大変だけど、毎日笑顔を浮かべ自分のやりたい事をやっているし、のんびりと日々を過ごしているのに、街と村何が違うんだ？ と思いながらも、既に中央広場へと着いているので考えるのを中断し噴水を見る。

そこには、やはり幼精ヴロヒ　水色の体と目はボールの様に丸く三角の形をした耳　が噴水の流れる水と戯れるように、目を細めながら飛びまわっている。

その様子に、笑顔を浮かべながら噴水へ近づき噴水の水を手で掬う。その行動の為かヴロヒ達近づきネ口の周りを飛び跳ねたり、クルクルと回ったりする。その行動に、さらにネ口は癒され笑顔を深める。1時間程ヴロヒを体に纏わりつかせながら、広場を行き交う人々を見る。

1時間程して、十分に堪能するとネ口は王宮を目にしようと思いい、北へと向かう。9時になっている事もあり仕事場に向かう人々が少なくなり、商業区の店が開き始めたのか客呼びの声を背後に、左右

には街路樹が均等に配置されている道歩く。

王宮の入り口の前へと着く。しかし、目の前に聳える巨大な扉のおかげで城の全容を確認する事が出来ず、ただ少しだけ尖塔だと思われる建物が左右に2つ見えるぐらいだった。そして、やはり自由に入れる訳がなく木製の大きな扉の右側には小さな扉があり、鎧を着込み槍持った兵士が2人立っている。その兵士たちは、城に入ろうとする者達を手元にある何かと交互に見て、大丈夫だと判断されたと思われる者は城の中へと入っていく。それを見ながら、兵士は大変だな、とネロは思いながら一応目的を達したので王宮を後にする。

それから、ネロは時間ギリギリまで適当に街を見回る。そして、時間30分前になったので街の入り口へと向かう。

南街道を進んでいると、前に何かのチラシを配っている女性がいた。

「もうすぐだよー！ 自信のある人は出てねー！ はい！」

そのチラシをネロも女性から受け取る。その時に女性は笑顔を振り向く。それに赤面しながらも誤魔化すようにチラシに視線を移し、内容を確認しながら女性から離れ入り口へ向かう。そして、チラシにはこう書かれていた。

剣魔術大会開催！！

開催日 リコフォス9月20日

開催場所 パシニイデイ王宮 特

別会場

出場条件 自信のある者！！

ルール 1、魔法の使用も可

但し、殺傷性の高い魔法は使用不可

2、武器は総べて刃

引きされたモノのみ

即失格とする

以上をルールとする。破った者は、

優勝した者には、王宮直属近衛騎士団へ入団する資格を得る。そして、賞金100万キクロスを褒賞とする。

ネロはチラシを確認すると、ネロはこの大会で自分が抱く思いが正しいか確認出来るのではと考える。それに、バルクにとってもチャンスだと思いチラシをポケットの中へと入れる。

そして、馬車の所へと向かい既に着いていたバルクにチラシを見せる。

「バルク、これに参加してみないか？」

「ん？ 剣魔術大会？ それに、王宮直属近衛騎士団への入団資格？ これは……」

「バルクは、参加してみる価値あるんじゃないか？」

「確かに、俺はあるが……おまえは参加するのか？」

「ああ、参加するつもりだよ。（俺が、剣を握り続けるためにも）」

バルクと剣魔術大会の事を、話していると時間になり村長が街から出て来て村へと帰る。

約1か月後、再びパシニイデイへ訪れる事を考えながら。

第8話（後書き）

感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に感想板にお書きください。

第9話(前書き)

2011/11/11 加筆修正

第9話

ネロ達3人は、街を昼に出発し村には太陽が沈み、月がもうすぐ、真上につくという時間帯に漸く村へ着くこととなった。ネロはバルクと一緒に馬車を降り、村長が馬車を止める様子を見る。馬車を止め終わったのか村長がこちらへ向かってきて、俺たちの目の前で足を止める。

「おつかれ。今回は助かったの。次もよろしく頼むの」

そう言つて、村長は村の中へと入っていく。その後ろ姿に、ネロとバルクはお辞儀をして見送る。村長が、だいぶ離れ姿が小さくなった頃漸く、ネロもバルクもお辞儀を辞めお互いに向かいあふ。

「んじゃ、明日から大会に向けて頑張るか!」

「ああ、そうだな。バルク、よろしく頼む!」

大会に向けての想いを胸に抱き、俺は手をバルクへ伸ばす。その手をバルクは見ると、一瞬苦笑するかの様に笑うと、伸ばした俺の手を取り強く握ってくる。突然の行動に内心首を傾げながらネロも、それに対抗するように強く握り返すとバルクもまた強く握り返してくる。その行為を繰り返していると、バルクが突然手を緩め、手を離す。それに、怪訝な顔をしてしまう。

「こんな事で勝負しても、面白くないだろ?」

「確かにな」

「勝負なら、大会で……だろ?」

「そうだな。なら、約束するよ。大会では、バルク……おまえに当たるまでは負けない。そして、優勝してやるよ!」

「俺も、同じセリフ言わせてもらっつよ」

約束をして、握手を交わす。そして、途中まで街の事や大会の事など話しながら、歩き別れる場所まで来ると、それぞれの家の方向へと向かっていった。

「ただいまー！」

「おかえりー！ 兄さん！」

家の扉を開け、帰ってきた挨拶をすると待っていたのか直ぐに返事が返ってきて、2階からバタバタと急いでいる足音が聞こえる。その様子に、呆れながらミウが降りてくるのを待つ。

「兄さん！ おみやげ！ おみやげ！」

階段から降りてきたミウの一声に、ミウの頭を思いっきり叩いてやりたい気持ちになりながらもポケットに手を入れる。そして、手を開きミウにペンダントを見せる。

兄の手の平にあるペンダントを見てミウは、顔を輝かせ喜び飛び跳ねる。

「わあーペンダントだあー。ありがとう！ 兄さん！ それにしても、良く買えたね？」

ペンダントを見て喜んでいたミウが、ペンダントに使われている素材に気付いたのか訊ねてくる。その疑問に特に躊躇する事もなく正直に答えてしまう。

「いや、それ貰いもんだから」

ネロの言葉に、ミウは一瞬で体の動きを止め顔を俯かせ溜め息を吐いた。

あれ？ 俺何か拙い事言っただけ？ と思うが、よく判らずミウが喋り出すのを待つ事にする。そう待つことにしてから長いような長くないような2分を、こちらを見てくるミウの気まずい視線に耐え、漸くミウが喋り始めた。

「兄さん！ いくら妹とはいえ女の子のプレゼントに、貰った物を渡すってどうなの？ しかも、それを正直に喋るし……」

「う……わ、わかったよ。次から、気をつけるよ……喋るの」

俺が、そう言うとミウがまたガミガミと言い始めた。最初は、確かに俺の考えが悪かったかなっと思って反省していたが、途中から全く関係ない事を語り出したので適当に返事をしていた。

そして、漸く言いたい事を言い終わったのか肩で息をしている。それでも、また口を開き何かを言おうとしているのを見て、まだかよ……とうんざりしていると、

「でも、本当にありがとね。これ一生大事にするから」

と言う言葉が聞こえ、ミウの顔を見ようとすると後ろを向き部屋へと上がっていきこうとしていた。だけど、ネロはミウの姿を見て笑顔を浮かべる。何故なら、ミウの足はスキップを踏んでいたのだから。

第9話（後書き）

ここ2・3日は、朝8時に予約掲載をして更新しているけど、何時ごろが沢山の人達に見て貰えるんだろう？
えっ？そんなの気にしてる時点で、駄目だって？

面白い作品なら、自然と人は見てくれる

そうですね、その通りな気がします。てな訳で、更新時間とか気にしない様にします。

ではでは、また明日！

感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に感想板にお書きください。

第10話(前書き)

2011/11/11 加筆修正

第10話

首都パシニイデイから、帰ってきて一夜が明ける。その日から、ネ口はバルクを相手に練習をしたり、東の森で狩りをしたりして大会前日までを過ごしていた。

そして、大会前日である今日。

練習を繰り返して、何度かバルクにも勝てるほどに腕を上げる事ができた。その事に少しだけ自信をつけ大会が楽しみになってきた。そんな心境になりながらネ口はバルクと、昼までを狩りをして過ごし今から街に向かうため、馬を引き村の入り口で、村の人達と挨拶を交わしていた。

「無茶しないようにねー！」

「2人とも頑張れよ！」

「出るなら、優勝！ それ以外は認めないからね！」

そんな激励？ を受けているとミウが人と人の隙間から体を割り込ませ前へ出てくる。

「兄さん、私も夕方頃だけど見に行くから。それまで負けないでね。バルクさんも頑張ってくださいね」

「あ、ああ。頑張るよ」

「ん？ ああ、わかってる。全力を尽くすだけさ、俺は約束を果たすためにもね」

そのミウの言葉に、ネ口とバルクはそう答えお互いの顔を見やり頷く。そろそろ、街へ向かうため馬へ跨る。そして、2人は村の人達に顔を向けた。

村の人達を視界に入れつつ、この村に戻ってくるのも3日後かと思

いながら村人に行つてきますの挨拶をする。

「それじゃ、行つてきます」

「行つてくるよ」

その言葉を、最後に馬を街へと走らせる。その後は只、街に着くのを最優先にし馬を走らせている。馬を休ませるために取った休憩のとき以外は、2人とも喋らずに進んでいた。

それでも、漸く街へ着いたところには太陽は沈み街の喧騒が収まりそうな頃合いであった。街へ着くと、直ぐに宿屋へと向かい、今日の寢床を確保する。運良く以前泊まった宿屋の部屋が空いていたため、そこで一夜を過ごした。

大会当日、朝起きると参加手続きの為2人は宿を後にし王宮へと向かう。王宮に着くと、同じく参加手続きの為か扉前で大勢の人達が並び兵士たちが受付をしていた。

俺たちも手続きを済ませる為、今並んでいる人達の後ろへ並び。そして、30分ぐらい経ち漸く俺たちの番が来る。

兵士の前へ立ち、言われた通りテーブルの上に置かれてる用紙に自分の名前と、使用する武器の種類を書き、その場を離れる。バルクも記入を終え、こちらへとやつてくる。そして2人は、扉を潜り王宮の中へと入る。

王宮へ入ると、奥へ続く階段がありその奥には豪華そうな扉が見える。その階段の前には、左右に扉があり、左側に大会の舞台である闘技場があるみたいだ。そこを、兵士に案内されながら進む。進んだ先にも、扉があり兵士が扉を開けると、目の前には円形の舞台があった。

周りを見ると円形の舞台を中心に、溝のような感じで今歩いている道があり、その外回りに観客が座る席となっているようだった。

そして、兵士へ着いて行くように進み、ちょうど先程出てきた場所

の反対側へ着くと扉があった。どうやら、兵士が言うにはこの先が選手の控室となっていているみたいで、兵士に呼ばれるまでそこで待機していなければ、いけないようだ。俺とバルクはその兵士の言う通りにし控室へ入る。既にそこには、20名ほどの参加者が待っていた。

それから、控室で待ち1時間経つと外の様子が煩くなりはじめた。そして、直ぐに拍手の音が聞こえ兵士が呼びに来た。

大会が始まり、結構な時間が経つがまだ俺もバルクも呼ばれていない。そして、控室にいる人数も減ってきていた。負けたら者は、直ぐに退散の為である。そして、まだネロとバルクの順番は来ないのかと思っていると何回目かの、兵士が近づいてくる足音が聞こえ控室の扉が開く。

「ネロ・エピシミア！ ヒュー・ミスト！ 来い！！」

漸くかと思いつながらも、呼ばれたネロはバルクへ頷いてから立ちあがり兵士の後ろへとついて行く。控室を出て、外へ出る。

すると、ネロたちを呼びに来た兵士に剣を渡される。相手も同じく、その兵士から短剣を2本渡されているのが見えた。

そして、1度緊張をほぐす為深呼吸を繰り返す。しかし、うまく緊張をほぐす事が出来ず余計に意識してしまい溜め息を吐いてしまう。仕方なく、俺は舞台へ上がり対戦相手と向き合う。その時になつてようやく、相手の姿が目に入る。茶色の髪を短く切り上げ、線の細い男であった。

そして、舞台全体に試合開始の合図が響く。

「第1回戦第8試合！ ネロ・エピシミア！！ ヒュー・ミスト！
！ 始め！！！！」

第10話（後書き）

感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に感想板にお書きください。

第11話(前書き)

2011/11/11 加筆修正

第11話

試合の開始の合図と同時に、ネロとヒューは相手に向かって走り出す。ネロは、剣の柄を両手で握り左手を体の前で交差させ、左肩の方が相手に近くなる形を取る。ヒューは、進むがままに両手を後ろへ流れるままの形を取っている。距離が近くなると、先にヒューから仕掛けてきた。

前へ飛び出し、その勢いのまま右手に持った短剣を横に振り抜いてくる。その攻撃を、下から掬い上げるように弾き返すが、こちらが振り上げた際ガラ空きになった横腹へヒューの持つ左の剣が襲いかかってくる。その攻撃をネロは、ジャンプをして左の剣の上を転がる様に回転して回避する。

「はあはあ」

ネロは、肩で息をしているがヒューはネロの動きを見逃さない様に睨み続けるだけ。やっぱり、命を懸けていないとはいえ大会の空気と訓練は全然違つと再認識しながら意識を戦闘に戻し、ヒューを見る。

その様子にネロは、長期戦はこちらが不利、と判断し直ぐに攻撃を始める。

上段から振り下ろし、左から薙ぐ。しかし、上段の攻撃は後ろに下がって避けられ、薙いだ攻撃は両手に持つ剣をクロスさせ止められる。そして、クロスさせた剣でネロの剣は上に大きく弾かれ体が大きく反れる。

反れて隙だらけとなったネロへと、ヒューは左足を軸に回し蹴りを放つ。ネロは、避ける事も出来ずにそのまま吹き飛ばされ地面を転がり、剣を手から離してしまった。

「くっう！」

吹き飛ばされ、地面に右手をつきヒューを見る。武器の無いネロにゆっくりと近づいてくるヒュー。近づいてくるヒューを見て、考える。何か反撃の手段は無いのかと。しかしネロの剣は、10メートル先に落ちており拾うにはヒューの横を通り過ぎなければいけない。ヒューという相手が、拾うのを許してくれるほど優しくはないだろう。そう考え、他の手段を探す。

しかし、周りには石ころ1つ落ちていない。ただ、己の体のみ。

「（本当に何も無いのか？ 本当に、このまま負けを宣言されるのか……バルクと戦わずに？ 折角、バルクにも勝てる様になったというのに！ やつと、俺にも守れるって自信が付き始めたのに！ ……いや！ 俺は、まだ戦う！ 約束を果たすためにも！ 自信を失わないためにも！ どんなに醜くても、勝つ！）」

そうよ、ネロ。あなたには、まだ戦う手段は残っている。思いださない……その力を

ネロが決意を新たにすると、女性の声……いや、ウンディーネの声が聞こえた。ウンディーネの声の言う通りにして、頭を巡らせ思いだす……魔法マジックの存在を。

ネロは、ゆっくりと立ち上がり目を閉じて、右手の手の平を見せるようにヒューの方へと突き出す。そのネロの動きに一瞬剣を構えるが、何も起こらないのを見ると怪訝な顔をしながらもゆっくりと近づいてくる。

ネロは、ゆっくりとはいえ近づいてくるヒューを気にする様子もなく、目を閉じた状態のままイメージを固める。ただ、ヒューに油断したから俺は勝つ事が出来ると心の中で感謝をしながら。

手の平から、間欠泉が噴き出すイメージを。そして、イメージのま

ま魔法を発動する。詠唱も魔方阵を描く事をしないまま。しかし発動した魔法はイメージしていた威力より強く発動してしまふ。発動した魔法に、驚いた顔を一瞬だけ見せてヒューは壁際まで吹き飛ばされ全身ずぶ濡れのまま気絶する。そして、ヒューと同じ方向にいた観客席の人達もまたずぶ濡れになってしまう。

「しょ！？ 勝者、ネロ！ ネロ・エピシミア！」

ジャッジの人も、突然の魔法発動による茫然自失から立ち直ったのか詰まりながらも、ネロの勝利宣言を会場全体に響き渡らせる。その声と、同時に一部を除き盛大な拍手が発生した。

しかし、勝者本人 ネロも発動した魔法にほとんどの意識を持っていかれ拍手に応じる事も出来ずに控室へと入っていった。

ネロが、控室へと入り姿を消した会場のとある場所にいた女性が後ろに控えていた老人に声を掛けていた。

「今の見たわね？ まさか、エレメントの覚醒者に出会えるとはね……うふふ。彼に見張りを付けなさい。そして、どんな手段を使っても彼を私の前に連れてくるのよ」

女性が最後まで言い終わると、老人はその女性へと一礼してその場から姿を消す。そして、その場にはネロが消えて行った控室がある場所を見続ける女性だけが残っていた。

第11話（後書き）

やっと、覚醒しました……何故か長かった気がします。何故だ？
まあ、それはいいや。それにしても、戦闘シーンやはりムズい。

では、次の更新までお待ちください。

感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に
感想板などにお書きください。

第12話(前書き)

2011/11/11 加筆修正

第12話

控室へ入ったネロは、声を掛ける事をせずに黙ってバルクの隣りの席へと座り、地面を見つめる。まさか、自分が魔法マジックを使えるなんてそれに、詠唱もしくは魔法陣も無しに発動させた。魔法を発動させるには、その2つのどちらかを使わないと発動できないはずなのにそんな事を考えて黙っていたためか、ネロの様子に疑問に思ったバルクが声を掛けてくる。

「どうした、ネロ？ 負けたのか？」

ネロの姿に、負けたと思ったのか隣りに腰かけるネロへ顔を向け問い掛けてきた。声を掛けられ、ネロはバルクへ顔を向ける。バルクへ顔を向けたネロは、いやと首を横へ振る。

「……勝ったさ。ギリギリだったけどな」

「なら、何故嬉しそうじゃないんだ？」

「嬉しいさ……魔法の事も」

ネロは魔法を使えるようになった事も、もちろん喜んで……はず。急に魔法を使えるようになった驚きで、それは判らなかった。そのため最後の言葉が、小さくなってしまった。

そのネロの言葉を理解できなかったのかバルクは、魔法という言葉マジックを小さな声で繰り返す。そして、言葉の意味を漸く意味を理解したのか、ガシ！ っとネロの肩を掴む。

「本当なのか、それは!？」

「あ、ああ。本当だよ」

「そうか！ おめでとう！」

ネ口の事を自分の事のようにバルクは大きな声を出して喜ぶ。その喜びように、周りにいる他の参加者が、何事だ？ という顔をしてこちらへ顔を向けてくる。それに、気付きネ口は苦笑いでこちらを見る参加者に頭を下げ、バルクへ向き直る。

「バルク……喜んでくれるのは嬉しいが周りを気にしてくれ」

「あはは……す、すまん」

バルクも、周りがこちらを見ていたのに気付いたのか恥ずかしそうに謝る。そのまま、バルクは先ほどよりも声を小さくして言葉を続ける。

「でも、本当良かったじゃないか！ 軍に所属すれば、魔法を使えるっただけで偉い立場になれるっつらしいし」

「軍に入れば、だろ？ 入らなければ意味ないし、俺は入るつもりないから。」

「あ、ああ。そうだった、な。」

（でもな、ネ口。その力があれば、もつと大勢の人間を。この国を守るんだぞ？）

そう話していると、兵士が入ってきた。

「バルク・スクード！ シーネ・フィー！ おまえ達の番だ、来い！」

遂に、バルクの番が来たようで、バルクが立ち上がり控室を出て行く。その後ろ姿が消えると、目を瞑り気持ちを落ち着かせる。そして、先ほどバルクに言われた事を思い出す。

「（魔法を使えるだけで偉い立場……それは、士気を高めるだけじゃないのか？ 極少数しか存在しないとされているからこそ、兵士たちは必死に守るため士気を高める……
そんな守られるような立場になるつもりはない。俺は、守られるんじゃないく守りたいんだ！）」

だからこそ、軍に入るつもりはないんだよと再び思いバルクが試合を終え戻ってくるのを静かに待つ。

それから、15分経つとバルクが勝ったようで控室へと戻ってくる。その姿には、戦闘に苦労した様子も怪我を負った様子もなく、しっかりとした足取りでネロの隣りに腰かけてくる。

「やっぱり余裕だったみたいだな」

「いやいや、そんな事はないぜ？ 結構厳しかったから」

そのバルクの言葉に、もう1度バルクの姿を見る。特に、服が破れていたりと、息が乱れていたりとという事もなく、ただ汗を流しているだけであった。その姿に、本当に厳しかったのか？ とか思いながらもバルクの言葉を信じて厳しかったと思ひこむ。

それから、大会は2回戦へ突入したみたいで参加者の名前が再び呼ばれ始める。そして、2回戦が始まり選手の呼び出しが5回目の時に、ネロが呼ばれる。

「ネロ・エピシミア！ ジョーム・シルミア！ 来い！！」

ネロは、立ち上がり深呼吸をしてから控室を後にし舞台へ上がる。そして、対戦相手のジョーム 金髪で前は長く左右に分け、後ろは短く切り上げた。鍛えられた体をしている。は、大剣を肩に乗せ互いに向き合い、対峙する。会場全体に、試合開始の合図が響く。

「第2回戦第5試合！ ネロ・エピシミア！！ ジョーム・シルミア！！ 始め！！！！」

その合図と同時に、ジョームは肩に乗せていた大剣を両手で持ち構える。ネロは、合図と同時にジョームへ向かって走り出す。後、5メートルに近づくと飛び上がり、体重を乗せ振り下ろす。

その攻撃をジョームは、冷静に上に大剣を翳しネロの剣を受け止める。受け止めた剣を弾き、ネロを引き寄せようと、左手を伸ばしてくる。

その左手を、ネロは右足を使い横に払う。ネロは、地面に着地して足を払おうと足払いを掛ける。だが、足払いは、ジャンプされ避けられて横に転がり距離を離される。

「土地よ！

！ マツを、

此处に縫い付けよ！！

ム？

「！

「くう！？」

どうやら、ジョームも魔法使い（マジシア）だったみたいで距離を開けられた時に、詠唱を終えていたのか魔法が発動する。

ネロが、立つ地面が蠢き1度左右に割れる。その後、ネロの足に絡み付くように纏わりつき固まる。

その纏わりついた地面から逃れるため、足をバタバタとさせる。しかし、纏わりつく地面から逃れる事は出来ずに、ジョームは近づいてくる。

ネロは、近づいてくるジョームに向かって先の戦闘で発動させた、間欠泉の様なイメージの魔法をジョームに向かって放つ。

「火よ！

敵を

??

燃やし尽くせ！！

「！

ジョームは近づきながら詠唱すると、ネロの魔法の周りへと纏わす。そして、ネロの魔法はジョームへ届く前に消え、その役目を終えた

ジヨームの魔法も消失する。

その光景に、ネロは目を見張りながらも更に一瞬で魔法を連続で発動する。ジヨームを閉じ込めるように水で囲い、間欠泉の魔法でジヨームを吹き飛ばす。

ジヨームは、詠唱して防ごうとするが詠唱が間に合わず水が口の中に入る。そのため最後の方を口にする事が出来ずに水に囲まれ息が出来ずに苦しんでいる所に、ネロの魔法によって場外へ吹き飛ばされてしまった。

「勝者！ ネロ・エピシミア！！」

ネロは、肩で息をしながら顔を顰めながら小さくガッツポーズを取る。しかし、地面に縫い付けられているためそこから動く事ができなかった。

その為、スタッフが地面を壊してくれるまで控室に戻る事ができなかった。

第12話（後書き）

詠唱の言葉は、ギリシヤ語ですが単語を並べているだけです。なので、基本は雰囲気みたいなのを感じていただければ大丈夫ですので、文法とかは気にしないでください。

感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に感想板にお書きください。

第13話(前書き)

2011/11/11 加筆修正

第13話

第2回戦の試合を、何とか勝利で終え控室へと戻る。その途中で、順番が来たのか会場へ向かうバルクとすれ違った。そのすれ違いざま、お互いに

「頑張れよ！」

「勝ったんだな！ おめでと！」

タッチを交わし、それぞれの目的の場所へと向かうのだった。それから、控室へと戻り空いていた椅子へと腰掛ける。

ネロは、先の試合を終えてから始まり出した頭痛に顔を顰めながらも、バルクが勝利し控室に戻ってくるのを、ジッと待つ。

だが、バルクも先程とは違い苦戦しているのか直ぐに戻ってくる事はなく時間が経つにつれて、ネロは焦りを覚える。

「(まさか、あいつが負けるのか？ あれだけ、強い奴でもか？

いやいや、相手が粘っているだけさ！ あいつが、負ける訳なんてないさ)」

そんな事を考えていると、バルクの試合が終わったのか兵士が次の試合の人達を呼び控室を後にする。その兵士の姿が消え、ネロは扉がある方をジーっと見つめる。

「(バルク……勝ったのか？ 負けたのか？ 開けるのは、おまえで合ってくれ！)」

兵士が姿を消し、30秒程経ち扉が開く。扉が、開き姿を見せたのは……バルクであった。現れたのが、バルクでありホツとして息を

吐くネロ。手を振り、場所を示すネロ。それに気付き、少し引き攣った笑顔を浮かべ、手を上げるバルク。

そのバルクの引き攣った笑顔に気付きネロは、やはり相手が手強かったんだな。と勝手に解釈して納得する。バルクは、ネロの隣りに腰かけて左側の脇腹を擦る。

ネロはその行動に心配になり、声を掛けた。

「大丈夫か？」

「多少痛むが、試合に響くほどじゃない」

「……そうか。それにしても、珍しいな。おまえが、そんなになるなんて」

「おまえ……俺をなんだと思ってる？」

「え？ そりゃ……どんな事でも判断をミスる事の無い完璧人間」

「なっ！？ おまえなあ！ 俺だって、間違えることだってあるわ！」

俺が、完璧人間と評価するとバルクにしては珍しく声を荒げて抗議してきた。その様子に、笑ってしまい何とか笑いを収めて謝り、天井を見上げ喋る。

「そつだよな。……この世界に、完璧な人間なんて存在する訳ないよな。」

不完全だからこそ、俺たちは人間なんだから」

その後も、バルクと適当に会話をして次の試合まで時間を潰していると漸く名前を呼ばれる。

「ネロ・エピシミア！ バルク・スクード！ 来い！！」

どうやら、次の試合の対戦相手はバルクであり約束通り当たる事はできたみたいだった。ネロは、立ち上がり同じく立ちあがったバルクへと向きなおり、握手を交わす。

「漸く、試合だな！ バルク！」

「ああ、そうだな。……ネロ！ 本気で掛かって来い！」

握手を交わした後、ネロは先に行き控室を後にする。そして、会場へ出て舞台の上で後ろから来ていたバルクと再び向かい合い、開始の合図を待つ。

「第3回戦！ 最終試合！！ 始め！！！」

「はあああああ！」

「うおおおおお！」

開始の合図と同時に、声を上げながらバルクへと向かう。同じく、声を上げながらこちらへと向かってくるバルク。

ネロは、バルクと本気で戦えるこの場所に立つ事ができて喜びを覚える。練習では、ネロが本気だとしてもバルクは本気で戦っていると思う事ができなかつたから。いつも、手加減をして俺と力を合わせていると思っっているから。だから、使い慣れていない魔法でも本気を出させるため、使っつてやる！ あいつが、本気を出したら俺なんて足元に及ばないとしても、本気のあいつと戦ってみたいから！

「だから、この場では魔法を出し惜しみしない！ だから、おまえも本気で来い！」

第13話（後書き）

……何か、グダグダしてる気がする。

感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に感想板にお書きください。

第14話(前書き)

2011/11/11 加筆修正

第14話

バルクとの試合が開始され、走ってバルクへ向かって走り出す。走り寄る間にも、バルクへ向かって丸いだけの魔法を5個、発生させ放つ。バルクは、自分に向かってくるものだけを剣を使って防いでくる。

その間に、バルクへ近づいたネロは肩を狙い、剣を振り下ろす。だけど、そう簡単に喰らう訳もなく剣で受け止められてしまう。その防御を崩そうと思い、更に押し出そうと力を加える。押し出そうと力を加えるが、バルクはそれを狙っていたのか均衡していた力が崩れ、右側へ受け流されてしまう。体勢を崩されガラ空きとなってしまうた背中へ剣を振り下ろしてくる。

その攻撃をネロは、少し頭痛を感じながらも圧力を高めた水を背中側へ発生させ攻撃を防ぎ、前へ転がってバルクと距離を取る。

「おいおい……便利だなあ。だが……！」

直ぐにバルクへ向き直りバルクの顔を見た。呆れているようなセリフを言いながら、バルクの顔は笑顔を浮かべていた。そして、こちらへ突っ込んでくる。

突っ込んでくるバルクからの攻撃を、剣を使い防ぐ。だが、1回防いだとしても直ぐに次の攻撃が来る。その連続攻撃を、ネロは後ろに下がりながらも防ぎ続ける。防いでいる間も、攻撃へ転じようと魔法のイメージを固めようとする。頭痛とバルクの連続攻撃に、慣れない魔法のイメージに何度も頭の中で途切れさせながらも、後2・3歩という場内ギリギリの所でイメージを完成させ発動させた。すると、バルクの右横に鞭の様にクネクネとする水が出現する。その水は、出現するとバルクが持つ剣を奪い取り、場外へ弾き飛ばす。

「なっ！？」

急に出現した鞭の様な水に剣を奪われ動きを止めたバルク。その隙を逃さずネロは、頭痛に耐えながら水鞭すいべんを発動させバルクを場外へと飛ばそうとする。

「ぐっ！？　ぐああああああ！！！」

しかし、バルクに水鞭が巻き付き飛ばそうという動きを見せたとき、突然両手で頭を抱え膝を地面につけ苦しみ出す。苦しみ出すと同時に、バルクに巻きついていた水鞭は形を保てず霧散し周りに水を撒き散らす。

「ネロ！？　おい、どうした！」

バルクは、服が濡れているのも気にせずネロへ近づき顔を覗き込む。しかし、バルクに気付く事もなく苦しみの声を上げ続けている。その様子に、周りを見渡し叫ぶ。

「誰か！　来てくれ！！　ネロがあー！」

バルクは、周りに助けを求め続ける。叫び続ける頭の中でバルクは、ネロに一体何が起きているのか？　疑問に思いつつも、対応の遅い兵士に向かって叫び続ける。

そして、ネロが苦しみ始めてから5分。漸く兵士がやってきてネロを抱え込み、会場を後にしていく。バルクも、その兵士たちについて行きネロの様子を窺う。ネロは、兵士が来る少し前に苦しみ叫んでいた様子を潜め、今はグツタリとしている。

控室とは逆の、王宮へ続く道を歩き王宮へと出る。兵士は、そのま

ま右にある扉を潜り医務室らしき場所へと入っていく。

中へ入ると人が居てその人は兵士に指示を出し、兵士は言う通りに奥にある2つ内の右側の寝台へとネロを寝かせる。その人は、兵士と言葉を交わすと寝かせられたネロの脈を測ったり息の確認をしたりしている。そして、その人は1人頷きバルクへ振り向く。

「どうも、初めまして。私は、王室付きの医者の方のヤトウロス・ドウトールだ」

そう挨拶をし手を差し出してくるヤトウロスに戸惑いながら、バルクも名乗り返しその手を握り返す。

「少し確認したいんだが……彼は、魔法を使えるだよな？」

「？ ええ、使えるようになったのは1試合目の時とネロは言っていましたか……」

「なら、魔法の使い過ぎで頭に負担が掛かり過ぎたんだろう。魔法使い（マギシア）は、1度頭の中にマナを取りこみ詠唱もしくは魔法陣を介して魔法を発動する。そのため使い過ぎると頭痛を感じたり、この子の様に気絶。最悪……死に至る」

「な！？ ネロは大丈夫なんですか！？」

ヤトウロスの最後の言葉を聞き、焦って彼の肩を掴む。そのバルクの様子に、まあまあと苦笑しながら肩に手を置き、落ち着けと言ってくる。彼は気絶、と再びヤトウロスに言われ恥ずかしげに顔を反らし、ネロの様子を見る。

ネロは、こちらの心配を馬鹿にする様に眠っているようだ。その様子にさつきまでの自分が馬鹿馬鹿しくなり、溜め息を吐いてヤトウロスにネロの事を任せ、会場に戻る。

「うっ……うっ」

気絶していたらしく、気付けば知らない所で眠っていた。状況を確認するために周りを見る。隣りには、ベッドがもう一つ有りカーテンは自分の方も開け放たれていた。人は居ないみたいで、正面の机には用紙が散らばっており、机の右隣りに薬の入った棚が置かれている。

どうやら、此処は医務室らしくバルクとの試合で気絶したネロを誰かが連れて来て寝かせてくれていたらしい。そして、自分の状態を確認し特に問題がなさそうと判断してベッドを立ち上がる。

立ち上がると同時に、扉が開かれる音がしてそちらを見る。白衣を着た30後半に見える医者にしては筋肉質な肉体をしている男性が、左手に飲み物を持ち入ってきた。

その男性が、こちらに気付き笑顔を向けてくる。

「どうやら、もう大丈夫そうだね。私は、王室付きの医者ヤトゥロス・ドウトールだ」

「ネロ・エピシミアです。どうも、有難う御座いました。試合ってどうなったかわかります？」

「ん？ ああ、今は準決勝だったかな。君のお友達も頑張っているよ」

無事に勝ち進んでいる様で、安心する。自分の所為で心配させ、その為試合に集中出来ずに負けてしまうのではないかと。だが、その心配は必要なかったみたいで良かったと思う。

ネロは、バルクの試合を見る為観客席へ行こうとヤトゥロスに1度お辞儀をして、医務室を出て行こうとする。

「ああ、ちょっと待ってくれ」

その言葉を掛けられ、医務室を出て行こうとした体をヤトウロスに戻し首を傾げる。

「実はね……陛下が君にお会いしたいそうなんだ。すまないが、私について来てくれ」

第14話（後書き）

もう少し掛かりそうですが、先に報告しておきたいと思います。
第1章が終わったら、第1章の修正をしていきたいと思っておりますので、宜しく願います。

感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に感想板にお書きください。

第15話(前書き)

2011/11/11 加筆修正

第15話

ヤトウロスに、女王陛下に呼ばれていると言われヤトウロスの後ろについて行く。しかし、何故自分が陛下に呼ばれているのか見当もつかないネロは、疑問に思いながらも陛下に会えば呼ばれた理由は判るだろうと考え、黙ってヤトウロスの後ろについて行く事にした。医務室を後にして、医務室へ続く扉の左斜めにある扉を潜る。扉を潜り15メートル程進み、正面と左にある扉の左側を潜り先へ進む。更に7メートル進み右にある階段を上る。その階段を上った先には、会場が見えておりその途中には豪華なイスが背もたれ部分をこちらに向け置いてあった。

そのイスが見えると、ヤトウロスはそのイスの隣りに膝きイスに腰かける人物へと声を掛けていた。

「女王陛下、御待たせしました。彼が漸く目覚めましたので、今お連れしました」

ヤトウロスが、女王陛下にそう申すと陛下と言われた人物の手が上げられヤトウロスは立ち上がり後ろへ下がる。その時、ヤトウロスの手に招き寄せられ先程ヤトウロスが、跪いていた位置へネロも跪く。

「女王陛下。お初に御目にかかります、私プロシウス村出身のネロ・エピシミアと申します。この度は、私のような者をお呼び頂き有難うございます。私に何用で御座いましょうか」

「ネロとやら、そなたの力。我に仕え、この国に繁栄をもたらす為、使う気はないか？」

ネロは、その言葉に困惑を覚える。女王陛下自ら、何も結果を残し

ていない平民を軍ではなく我に仕えよと言ってくる。いきなりの言葉に疑問に思ってしまう。確かに、名誉な事だとは理解している。だけど、自らの利益の為に他者を殺すかもしれない場所に仕えようとは思えない。ネロは、自分や自分の大切な人を守る為にしか武器を手に取る想いはあった。

しかし、それ以外の理由で武器を手に取るつもりはない。その事を正直に言い、断る。

「ふむ……命が危険に晒された時にのみ武器を取る。……傲慢だな。自分達さえ守れたら良いと？ それさえも出来ない弱い者たちはどうする？ だからこそ、力ある者は弱い者を害ある者から守る為の存在でなければいかんのだよ。それでも、変わらないか？」

「……はい。私は、私の身近な人達だけを守ればそれだけで構いません」

その言葉を最後に、女王陛下は下がれとネロに命令しそれに従ってその場を後にする。

力ある者……ネロにとって力は妹のミウや村の人達を守れたら充分なんだ。この国やこの国の知らない人間達を守る為に力を求めて練習したり、魔法を使える事を喜んだ訳じゃない。

傲慢なんかでもない……自分の力で守れるのは村の人達で限界。そう思っているだけだ。守れるなら、守りたいさバルクが守りたいと思っっている者を。

そんな事を考えていると、いつの間にか一般の観客席へ着いており空いている場所を探そうと周りを見渡す。すると、右側にミウと村長の姿を見つけそちらに歩み寄り声を掛ける。

声を掛けると、ミウがこちらへ振り向き声を掛けたのがネロだと気付く。

「あつ！ 兄さん！ お疲れ様ー。来るの遅かったから見れてないんだけど、いつ負けたの？」

「……3回戦でバルクに負けたよ」

「そうなんだー。兄さんの活躍みたかったなあ。あーあ、兄さんたちと一緒に来れば良かったかも」

そう言うとミウは、落ち込んだ表情をする。そんな表情をするミウには悪いが、自分の試合を見られなくて良かったと思っっている。ミウには、魔法が使える事をまだ知られなくなかったから。いつか必ず知られる時が来るとは思っけていても。

ネロは、舞台の方を見る。しかし、舞台では兵士が何やら作業をしているだけで試合が始まりそうな感じではなかった。それに疑問を覚え、ミウに問い掛けた。

「おい、ミウ。試合はどうなった？ バルクは？」

「試合なら、終わったよ。で今は表彰式？ の準備してる。バルクさんは準決勝で負けたよ。だから、そろそろ外で待つてようかなって思った所に、兄さんが来た」

ミウの言葉に頷き、ミウの言うとおり外でバルクを待つ事にしてネロを先頭にミウ達は観客席を後にしていく。

観客席を後にし、選手の控室へ続く扉の近くで待つていると5分ぐらいてバルクが現れる。バルクは、ネロたちに気付くと手を上げ駆け足でこちらへ近づいてくる。近づいてきて、ネロを見るとその元気そうな姿に安心したのかホッと息を吐き、直ぐにミウから称賛の言葉が掛けられている。

それから、少ししてバルクが周りを見渡し声を掛ける。

「それじゃ、今日は遅いし宿に行こうか」

バルクの言葉に、ミウは手を大きく振り返事を返し村長はポーとしている。そして、そのまま4人は昨日ネロたち2人が泊まった宿屋へと向かい、そこで1夜を過ごした。

第15話（後書き）

すみません、誠に勝手ながら明日の更新は御休みとさせていただきます。

感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に感想板にお書きください

第16話(前書き)

2011/11/11 加筆修正

第16話

大会があつた日から、1夜明け最後に合流したミウを連れ村の人達のお土産を求めて2時間ほど街を彷徨い続ける。村長は、先に帰りの馬車などを準備するために街の外で待っていてくれている。

お土産を買い終え、ネ口とバルクは多めにミウも少し荷物を持って街の外へ出る。外で待っている村長へ近づき、その近くに止まっている馬車へ持つている荷物を乗せる。乗せ終わると、ミウと村長に先に行くように言い馬車が走り出すのを待つ。

ネ口たちは、ミウ達が乗った馬車がある程度離れるまで見送ると馬を取りに小屋へと向かう。馬を受け取り小屋の管理人にお礼を言い、その場で馬に跨る。そして、ミウ達が乗った馬車が向かった方向へと走り出した。走り出し、10分程して馬車へ追いつく。ネ口達は馬車に馬のスピードを合わせ一緒に村の帰途へつく。

それから、夜9時ぐらいに4人は村へ着き村人達へお土産を配る為、ネ口とバルク2人で配っていく。ミウは、家に帰り夕食の準備をするために配っていく輪に入っておらず、村長に至っては、

「後よろしくのお」

と言つて、さつさと家へと戻つていった。

村人達に、配っている時にやはり大会の結果が気になっていたのかお土産のお礼もそこに殆どの人が、聞いてくる。

それに、内心恥ずかしく感じながら正直に結果を伝える。その結果を聞くと、村人達は

「頑張つたな」

と自分の事の様に嬉しそうに褒めてくれたり、

「次頑張れ」

と悔しげに叱咤してくれたりと様々な言葉を掛けてくる。そんな風に声を掛けてくる村人達を見て、やっぱりこの村は自分で守りたい。どんなに、大変だとしてもその想いは強くなる。それに、ミウもいる。今はたった1人の家族であるミウがいるんだから。

そんな事を思いながらお土産を配り終え、橋で待っているバルクと合流する。

「なあ、バルク。おまえが以前、『軍に入る』って言った時、俺はこの村を守りたい。そう言ったよな？ 今も……いや、あの時よりも村を自分の手で守りたい。この他人の事を、自分の事のように笑ったり、悲しんだり、怒ったり。そんな事が出来るこの村を守りたい」

バルクは、話を聞き終わると目を瞑って沈黙する。そんな、バルクが喋り出すまで待つ。ネ口は、バルクに知ってほしかった。今の自分の気持ちを。それを聞いたバルクに、どう思われようとも。短いとも長いとも感じた数秒、漸くバルクが目を開きネ口を見る。

「それが、自ら決めた事なら俺は何も言えないさ……」

そうバルクに言われ、知らず知らずの内に緊張していたのかホツと気が緩むのを感じた。どうやら、バルクに色々と言われると無意識に思っていたらしい。そんな自分に、心の中で苦笑し呆れてしまう。

「おまえが、村を守りたい。と言うなら早いが俺からの頼みを聞いてくれ」

「？」

「母さんと、父さんを守ってくれ……！」

正直、バルクから頼み事を言われるなんて思ってもいなかったから予想が出来なかった。だけど、その頼みごとを聞いてみると、わざわざ言われる程の事でもないと思ってしまうその返事に呆れを含んでしまう。

「なんだよ……そんな事頼まれなくても勝手にやるっての」

そう返事をする、バルクが珍しくブツブツと何かを言っている。それに、笑ってしまうと更に何かを言ってきて、自宅がある方向へ向き手を上げ、

「じゃあな、また明日」

と言って立ち去っていく。その姿に、流石に笑い過ぎたかなと思ひ明日謝ろうと決め、家に向かって歩き出す。

家の前へ着き、扉を開けようと扉に手をかざす。すると、開ける前に急にこちらに向かって扉が開くの驚き、尻もちをついてしまう。ミウに言葉を掛けようと、顔を上げる。しかし、ネロに映ったのは黒尽くめの姿をした謎の集団達で、その1人の腕には眠っているのかグッタリとしたミウが抱えられていた。その状況に、驚いて声を上げてしまう。

「なっ!? おまえら、ミウに何をやるんだ!!」

急いでそいつらからミウを引き離そうと手を伸ばす。だが、ミウに手が届く前にまだ家にいた人間に伸ばした手を蹴られ、顔も蹴られて地面に頭を打つ。そのまま、ミウを攫った集団は走り去っていき直ぐに見えなくなる。

ネロは、直ぐに追い掛けようと立ち上がり走り出そうとするが、頭

を打ったとき脳震盪を起こしてしまったのか直ぐに立ち止ってしま
う。

「ぐう……こんなときに……早くしないと」

頭を押さえ、クラクラとする状態のまま追い掛けるため走り出し村
の入り口につく。南北、あの集団がどちらに向かったのか。方角を
ハッキリとさせるためそれぞれの方角を調べる。南の方を調べてい
ると、地面にミウにプレゼントしたペンダントが落ちている。月明
かりの光を反射していたため、気付く事が出来た。その事に気づけ
た事に幸運を感じつつも、そのペンダントを拾って自分の首に掛け
る。

そのペンダントを握りしめ、ミウは必ず助け出すと誓い拾った方角
を見る。

攫った集団が、南へ向かっていると判断して南の方角へと向かう。
南は、エリピオという他国へと続く道でもある。そちらに、向かっ
ているという事は攫ったのはエリピオの誰か？ 本当にエリピオな
のか？ いや、今は誰が攫ったのかを考えるのは後で良い。まずは、
追いつきミウを助けるのが先だ！

30分程進んでいると、謎の集団と思われる集団が見えた。しかし、
何とか奇跡的に集団を視認出来る距離まで追い付く事が出来た。が、
追い付くのは簡単ではない。そう考え、脳震盪を起こした状態のま
ま集団の前に、何とかデカイ水の壁を発生させ無理やり足を止めさ
せる。

デカイ水の壁が発生したのに驚いたのか、集団がこちらに向くのが
見えた。そして、漸く集団の前に立つ事が出来た。

「貴様ら！ はあはあ……ぐっ……ミウを返せ！」

集団の前に立ち、何とか言葉を紡ぐ。すると、集団から笑い声が聞

こえる。恐らく、状況を見て言えよ！
とか思われたんだろう。だが、同じ言葉を

「返せ！」

と繰り返す。すると、後ろからミウを抱えた人物がこちらに姿を現す。だが、ミウは相変わらずグツタリとしている。この状況で、気づかないとは何か強力な薬でも打たれたのかと思えば感情が高ぶる。

「ネロ・エピシミア。ここまで、御苦労」

「!?!」

その人物から、自分の名前が出てきて驚く。しかし、その人物はこちらの反応を気にすることもなく言葉を続ける。

「彼女を返すのは、構わないが条件がある。……我が主に仕えよ」

「悪いが、断る！」

そんな事の為に妹を、ミウを攫ったのか。そんな自分勝手な思いで、こんな事を出来る人間に仕える気はない。

……ちよつと待てよ？ 俺の名前を知っている上に、仕えよ？ まさか、女王陛下なのか……？

相手は、ネロの返事に溜め息を吐くともう1度同じ事を問うてくる。しかし、こちらもこの様な事をしてくる人間に仕える気なんて全くない。

「……そうか、残念だ。力ある者は、選ぶべき道も間違えては駄目だというのに」

そう言うと、その人物は抱えていたミウをこちらへ放り投げてくる。

そのいきなりの行動に、焦り直ぐに動く事が出来なかった。しかし、相手の行動はそれだけでは終わらなかった。ミウを放り投げると、左腰に挿している直剣を抜き、ミウの心臓へと向かって投げる。その剣は、外れることなくミウの心臓へと吸い込まれていく。

そして、ミウが地面に落ちる音で今の状態を理解し、呆然とミウが倒れている所へと近づいて行く。

ネロは、自分の体や服が血で汚れる事も気付かずに、今も血の池が広がり続けるミウの傍へと膝をつき腕に抱え込む。

「ミウ……ミウ？　なあ、目を開けてくれ……！　なあ！？」

あの人物が、投げた剣は心臓を貫いている。もう、助かるはずがない。そう頭では既に理解している。でも、納得できる訳がない。少し前までは、笑顔で喋っていたんだ。それなのに、こんな簡単に……

……？　いや、違う。これは、夢なんだ……夢なら早く覚めてくれ！！

「ネロ・エピシミア。現実を見る。君が間違えた。だから大切な妹は死んだんだ。さあ、次は自らの命を散らすかね？」

「うう……うう」

冷たくなりつつあるミウを抱え込む。ネロは、1番守りたい人間を守れなかったという思考が頭を支配しミウだけを映す。ミウ以外の人間は邪魔だ。何かに呑み込まれて、この場からいなくなれば良い。今は、2人きりでいたいから。

ネロは、無意識に魔法を発動させる。その魔法の形は、首と胴体と思われる場所の太さが均一。顔は蛇に見える龍の姿の水であった。

その龍は、1度ネロとミウを包み込みかのように周りを回る。

その魔法の形を見た集団は、恐怖を感じ1歩後ずさる。そして、それを見ていた龍は意思があるかの様に、口を開き集団へ向かっていく。

こちらに向かってくる龍から逃げるべく集団は全員後ろへ向き逃げ出した。しかし、人間如きのスピードで、逃げ出せる訳もなく10秒程で全員が龍に呑み込まれ、体を氷漬けにされる。龍は、呑み込んだまま上空へと飛んでいき顔が雲へ突っ込むとその姿は消え、氷漬けとなった人間もそのまま何処かへと消える。

「ミウ……村へ帰ろう。村の人達が待つてるから」

ネロは、ミウを抱え上げ村の方角へフラフラとしながら歩き出す。しかし、5分程歩いていると、急に頭が割れそうなほどの頭痛が起きミウを地面へと落としてしまう。

「ぐう!?　ぐあああああああああああああああああ!
!!!!!!!!!!」

ネロは、その凄まじい痛みには耐えきれず川がある方向へと時々コケながら進む。そして、そのまま気付く事もなくネロは川へと落ちた。

第16話（後書き）

次で第1章は終わります

感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に感想板にお書きください

第17話(前書き)

2011/11/11 加筆修正

第17話

ネロが行方不明になり、ミウちゃんの死体が見つかり3日。

街から村に帰ってきてネロと別れて自宅へ戻った。そして、1時間程。ネロの自宅が燃やされているのを村の人が気付く。急いで村人総出で、火の鎮火を始めて、1時間。他の家との距離が開いてあつたため燃え移ることなく無事も鎮火が出来た。

そして、崩れない様に気を付けながらネロ達を救出するべく家の中へと入っていく。

家の中を探していくが、ネロ達の姿が見つからず一先ず安心する。しかし、こんな夜遅くに出かける様な事はあの2人がするはずがない。だけど、ならば何処にいる？ そう皆が思ったのか、村の周辺を探していく。

バルクに他の村人と一緒に、村の外へ出て北の方角へ探しに向かう。しかし、何処まで進んでも人1人見つからず太陽が昇り始める。仕方なく、1度村に戻ることにして帰途へ着く。

太陽が、真上に昇る頃。バルク達は村へと戻ってきた。バルク達が、村へ入ると村人の雰囲気は暗く、皆気持ち沈んでいる様であった。バルクはそんな村人の1人に、何があつたのかと声を掛ける。

「ああ……南の方角へ向かった奴らが見つけたんだが……」

その後が続いた言葉を聞いて、直ぐに言われた場所へと走り出す。其処には、眠っている様な直ぐにでも目を覚ましそうな顔をしたミウが地面に降ろされていた。ただ、胸を貫き開いた傷がそれを全て夢だと嫌でも気付かされる。

何故だ、一体何があつたんだ？ それに、ネロは無事なのか……。ミウちゃんを見つけた村人達が、見つけた周辺を捜しまわつたらしいが、ネロの姿は見当たらず。ただ、ある一帯だけ何かが這えずり

回った様な地面の姿を残していたらしい。

バルクは、後悔の念を覚える。あの時、ネロと別れず一緒にネロの自宅へ行っていれば何かが変わっていたのではと考えずにはいられない。

それから、3日間。ミウちゃんの墓を造り、村人達は分担してネロの搜索を続けている。バルクもネロを探しつつ、いつも以上に練習に力を入れて続けた。

それからも、搜索を続けているが月日が経つにつれて村人達は諦め、いつの日かネロの墓も造り日々の生活へと戻っていった。しかしバルクだけは、それでも諦めずに村の外へ出るたびに探し続けていった。

「ああ、構わん。彼らが我ら民へ害を為すなら排除しろ！」

兵士が、状況を伝えてくる。それに、指示を出し兵士が部屋を去るのを豪華に装飾された椅子へと座りながら見守る。その兵士が、立ち去るとすぐに別の兵士が、慌てた様子で入ってくる。

「陛下！ 彼が……！ 彼が目覚めました！」

その兵士から齎された報せに、漸くかと口に笑みを浮かべ椅子から立ち上がる。そのまま、報せを持ってきた兵士についてくる様に言い、部屋を後にする。

部屋を出ると、後ろについてくる兵士を伴い絨毯が轆かれている廊下を歩いて行く。その向かっている先には、3日前の遠征の道中で川に寄り添うように倒れている水色の髪をした青年を見つけた。そのまま、その青年を急いで王城へ運び、その部屋で寝かせている。

何故か、水色の髪を見た瞬間。彼を自分で保護しなくてはいけないという衝動に駆られた。その理由を知るべく彼が休んでいる部屋へと入っていく。

部屋に入ると、彼は上半身に服を身に着けておらず体を起こした状態で医者に体を調べられている。

その医者は、入ってきたこちらに気付くとお辞儀をして彼の前を空ける。その彼の前に、部屋に備え付けられている椅子に、左後ろには兵士、右後ろには医者を控えさせ座る。

その様子に、彼はキョトンとした表情を見せながらこちらへ顔を向けてくるが彼へ声を掛ける前に、医者に彼の状態を確認する。

「彼の状態は、殆ど健康な人と変わりありません。ただ……」

医者が言うには、健康状態は良好。それには、素直に安心する。しかし、自分の名前など思い出せない記憶喪失となっているらしい。それを聞き、自分でも確認するため彼へと声を掛ける。

「名前を思い出せないというのは、本当かい？」

「は、はい……すみません」

「謝る必要はないよ。しかし、名前が判らないと君が住んでいた場所を探すのに時間が掛かりそうだな」

そう言うと、彼は更に申し訳なさそうな表情を見せる。それに、気にする必要はないと言い彼の左肩を叩く。その彼に、何か質問は無いかと問い掛ける。そう問いかけると、彼は言葉に詰まりながらも答えてくる。

「あ、あの……貴方は誰……なんですか？」

その言葉に、後ろに控えていた兵士が前へ出て変わりに答えようと

するが、それを手で制止する。自分の名前ぐらい自分で名乗らせて欲しいもんだ。と思いながら自分の左手を胸に添え、名前を名乗る。

「初めまして。私は、カタス。カタス・トロフィだ。宜しく」

名乗り彼と握手するため手を伸ばす。その伸ばした手を見て、恐る恐る手を伸ばして握ってくる。そして、彼も名乗ろうと、

「僕は……」

だが、言うてから気付いたのか苦笑して困った顔をする。確かに、名前がないと困ることが多そうだ。彼に、思いだすまでの間という事で名前を付けようと思いきや考えを巡らせる。

「プロドティス。プロドティス・トロフィ」

彼の名前を決めると兵士と医者たちが声を荒げてくる。そんな兵士と医者たちに顔を向けてハッキリと言う。

「彼が、自分の事を思い出し帰る場所が判るまで、トロフィ家で保護する。それが、王家であるトロフィ家の私が連れてきた責任だ。途中で放り出すなど王家の人間が出来る訳がない」

私が、王家であることを名乗るとプロドティスは驚き、恐々と王家という言葉を探り返す。そんな、プロドティスに向き直る。

「そういえば、言うてなかったな。それでは改めて、名乗らせて頂きたい。エリピオ王国第27代国王、カタス・トロフィだ」

第17話（後書き）

これで、第1章が終わりです。

次は、第2章としたいんですが以前報告した通り、第1章の書き直しをしていきたいと思えます。

書き直し期間ですが、一応2週間で予定しておりますが前後するかもしれません。

勝手ですが宜しく願います。一応、活動報告で報告を適度にしていきたいと思えます。

感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に感想板にお書きください

第18話(前書き)

お待たせしました、第2章の開始です。

第18話

プロドティスが、目覚めてから3日が経った。目覚めてから、医者
の指示に従い安静の為にベッドの上で1日1日を過ごしていた。

その間にも度々業務の合間を縫ってカタス陛下、いや兄上か……と
呼ぶように言われたがまだ慣れない。

が、地図を持ってきて聞き覚えがある地名がないかと尋ねてくる。

そのついでに国の状況なども教えてくれたが、残念ながら聞き覚え
のある地名はなかった。

そして、今の国の状況だが残念ながら芳しくないみたいで、エリピ
オ王国の北にあり、フルリオ鉱山を越えた先、ワイル国。国内の北
半分が砂漠と化し住める場所が年々減ってきていた。その様な状態
のワイル国から、エリピオ王国を明け渡せと身勝手な通達が記され
た封書が使者によって、2年程前に届いたがエリピオ王国の領土に
も限界がある。

しかし、事情が事情のためワイル国の国民3分の1までなら受け入
れよう、残りは他国を頼ってくれといった記した封書を使者に渡し
たそうだが、その返事是否。

こちらの条件に納得せずに、明け渡せと断られた場合は力尽くで貴
国を頂戴すると記された封書がカタス陛下の所に再び届けられたそ
うだった。

さすがのカタスも、その返事に呆れていた様だったがその内容に納
得できるわけがなく、断りの返事と防衛のため、軍を鉱山の入り口
に派遣したそうだ。

それから、2年経過しているが小規模な戦闘は度々起こったそうだが、大規模な軍の派遣がフルリオ鉱山方面へ行われた様子が今まで
ない、ということだった。

しかし、エリピオ王国から北東。ワイル帝国から東に位置する、ウ
イルド共和国はワイル帝国によって大規模戦闘が頻発しているみた

いだった。おそらく、地形的に攻めにくいエリピオは後回しにして先にウィルドを落とそうという魂胆なのだろう。

しかし、ウィルドはパシニイデに援軍の要請を行い、パシニイデは要請を受けた為、ワイルはエリピオとウィルドを攻めることが出来ずに、今は両軍とも静観の状態を保っているようだった。

そんな緊迫した状況であるが、プロドティスは実感がないたためか漸く医者から外出の許可が出たため、城の中を歩いていった。

自分が使っていた部屋を出ると、どうやら1番突き当たりの部屋だったようで左へ体を向け、そのまま真っ直ぐ歩いていく。

「（何だか、この豪華な感じ落ち着かないな……それにこの服も着たこともないような肌触りなんだが）」

プロドティスは、自分が記憶を失っているはずなのにこのこの心が落ち着かない感覚に戸惑いを覚えてしまう。この感覚でもしかしたら、自分は平民だったのではないかと思ってしまった。だけど、この感覚の事は後で兄上に報告すれば良いかと考えて、左右に分かれている廊下を交互に見渡す。

しかし、左右どちらも確認するが人が誰も居らず仕方なくもう1度左右を確認する。右は、どうやら更に奥へと続くみたいで廊下が、左に折れているのが見える。左を見ると、奥へ続く廊下の途中で右へ抜ける扉があり、その奥には花が植えてあるのが見える。

プロドティスは、そのまま左奥へと進み花が植えられていた場所へと出る。そこは、円の形をしておりプロドティスが出てきた場所の反対側にもう1つの出入り口が見える。

そして、既に先客である兄上と、兜は手に持ち鎧を着ている兵士が何かを話しているところであった。

「……ノス、……の……山……穴」

「……か。す……わ……しら……」

何かを話しているが、声が小さいためか所々しか聞き取ることが出来ないでいた。内容は気になるが自分が聞いて良い内容なのか判断できなかった為、近づけず2人の話が終わるのを立って待つことしか選べなかった。

それから、2分〜3分程して漸く話が終わったのか兵士が一礼してその場を去るとプロドティスはカタスに近寄っていく。

「プロド、漸く外に出られるようになったんだな」

「はい、兄上」

「どうだ？ 城の中を少し歩いてみて」

「少し、豪華な所が落ち着かない感じがしましたね。もしかしたら、平民だったのではないかと思っただんですが……」

「そうか。ならば、そちらの方向をメインに当たってみようか」

「はい、お願いします兄上。それで、兄上。先程の兵士と何を話されていたんですか？」

「ん？ ああ、何大した事じゃないさ……ただフルリオ鉱山のある場所でワイル帝国の兵士を見たという報告を受けただけだ。もちろん、調査隊を派遣するよう指示を出した。プロドが気にする様な内容じゃないよ」

いや、結構気にするべき内容じゃないのか？ と思い、頭の片隅にでも覚えておこうとする。そして、カタスは業務が残っていたため、プロドティスに簡単に挨拶を済ませこの場を去っていった。立ち去っていくのをプロドティスは、お辞儀をして見送る。

そして、プロドティスも本来の目的である城の探索を再開しカタスが消えていった方へと歩き出した。

第18話（後書き）

感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に感想版にお書きください。

第19話

プロドティスは、花が咲いていた場所から更に奥へと進んでいく。すると、また左右に分かれている廊下で立ち止まる。立ち止まったが、右の方角から何やら何かがぶつかり合う音が聞こえそちらへと足を向けた。

足を向けた先には、鎧を着込んだ兵士達が訓練に励んでいる姿が映っていた。どうやら、此処は訓練所みたいで、その様子を何となく見ていた。すると、休憩中だった兵士がプロドティスに声を掛けてくる。

「これはこれは、陛下の弟さんではありませんか」

しかし、その声からは侮蔑の雰囲気漂っている。だが、それも仕方のないことなのかもしれない。何処かで拾われた正体不明の人間が、トロフィ家と名乗っているのだから。

城に住む大半の人間は、プロドティスがトロフィ家と名乗るのを一時的とはいえ納得しているわけではなかった。ただ、カタス陛下が城の者を集めて公言したから陛下の前では納得していると見せ掛けているだけである。

「おい！ 皆。プロドティス様が来られているぞ！」

プロドティスに声を掛けてきた兵士が、そう叫ぶと打ち合っていた兵士が打ち合いをやめこちらを見てくる。

「どうです、プロドティス様？ 少し参加してみませんか？ プロドティス様が参加していただければ我らの士気も上がるかと思うんですが……」

「そうだな、ずっとベッドの上だったし体を動かしてみるか」

プロドティスが、参加を表明すると兵士に木刀を渡される。木刀を持つとずっしりとした重さが手に伝わる。その重さに慣れるため中央へ向かいながら軽く振り回す。

少しは感覚に慣れたため動きを止め、前を見る。そこには、既に練習相手の兵士が1人立っていた。

そして、お互いに一礼して木刀を構える。

相手が構えるのを確認すると、プロドティスは相手に向かって走り出し木刀を振り下ろす。それを、体を少し横にずれて避ける。避けられるのは、分かっていた。だから、すぐに相手に向かって切り上げる。

それを、相手は持っていた木刀で防ぐ。

プロドティスは、防がれると距離を取ろうと右足を後ろに移動させようと動く。プロドティスが、後ろに下がろうとするのを見計らっていたのか相手は前へ踏み込もうとする。

しかし、プロドティスはそれを狙っていたためすぐに後ろに移動させようとした右足を斜め前へと動かし、相手の側面を取る。そして、そのまま相手の背中へと木刀を振り下ろす。

「すまない、立てるか？」

プロドティスによつて、地面へ倒れこんだ兵士に声を掛けながら左手を差し出す。相手は、その左手を睨み付けると、左手で払い除け自力で立ち上がる。

その行動に、プロドティスは苦笑いを浮かべてしまう。

「（全く、此処に来て感じていたが、嫌われているな俺）」

それが分かっているから、此方から歩み寄ろうとしたが無下に立ち

去っていく。そして、立ち去った兵士は、何やら集団で話をしている。その話が、終わるのを黙って待つ。漸く、話し合いが終わったのか兵士の1人がこちらへ向き直り笑顔を張り付け、喋り始めた。

「流石は、弟さんだ。まさか、こちらが負けてしまつとは思いませんでしたよ……。さて、弟さんが良ければ次は、3人同時にやってみませんか？」

「3人？ 俺対そちら3人って事か？」

「ええ、そうですね。どうです？ 病み上がりの貴族である弟さんには厳しいかもしれませんが……」

そこまでして俺を地面に這い蹲らせたのかと呆れながらも、その提案に乗る。おそらく、3人でも問題はないだろうと思う。魔法^{マジック}さえ使えば。

プロドティスが、木刀を構えると兵士3人も木刀を構える。プロドティスは、そのまま相手が仕掛けてくるのを待つ事にする。

そして、相手3人はお互いに距離を取りつつプロドティスに攻撃を仕掛けてくる。プロドティスは、左右に立つ2人の攻撃を木刀で弾き、弾かれた隙を突き蹴り飛ばす。そして、正面の兵士の攻撃は木刀を掲げ受け止める。

受け止めて手出しが出来ない所を、先程蹴り飛ばした兵士2人が攻撃を仕掛けてくる。しかし、プロドティスは、その攻撃に焦る事もなく冷静に魔法を発動させ防ぐ。

いきなりの魔法発動に戦っている兵士3人や、外野で観戦している兵士たちも驚いて動きが止まってしまう。

その隙を突き、プロドティスは3人の前に水鞭^{すいべん}を発動させ武器を取り上げてから吹き飛ばす。

吹き飛ばされた音で我に返った外野の兵士たちは、急にプロドティスの前に跪き始める。

そのいきなりの行動にプロドティスは、意味が分からず怪訝な表情を浮かべてしまう。

「申し訳ございません！ プロドティス様！ 此れまでの数々の無礼、どんな罰でも受ける所存でございます！」

プロドティスは、いきなりの兵士たちの言葉に焦ってしまい言葉が詰まる。

「いや……あ、あのさ。すまないが、理由を説明……してくれないか？」

「それは、私から説明しようか。プロド」

兵士に急に跪く理由を聞くと、別の所。プロドティスの後ろから声が掛かる。すると、更に兵士たちは恐縮した雰囲気を醸し出す。プロドティスは、後ろを振り向くと先程業務が残っているからと言って別れたはずのカタスがそこに居た。

「すまないが、プロド。此処で説明もあれだから、私についてきてくれ」

そして、カタスは兵士たちに訓練に戻るように言うとプロドティスがついてきているのも確認せずに、訓練所を後にするのだった。

ネロが、行方不明になり半年。未だに、バルクは街や時々擦れ違つ商人達に話を聞いているが有益な話を聞くことはなかった。

村全体は、既にネロも亡くなっていると生存は諦めており墓標を建てて普段の生活へと戻っていた。一部の村人は、ネロやミウの事を

忘れていた輩さえもいる始末であった。

その事に、バルクは信じられない思いが心を支配していく。何故、そんな簡単に今まで一緒に村に住んでいた人間を忘れられるのか、解らない。

バルクが、いつかネロが戻ってきてても良いように時間を見つけては家を建てている。しかし、ネロの事を忘れていた人が、何をやってるんだ？ と問い掛けてくる事がありネロの事を話すと戸惑ったような表情を見せ、少しすると思いついたように言葉を紡ぎ、最後にがんばれよと声を掛けていく人達が時間が経つに連れ増えていく。そんな人を見るたびに、バルクは悔しい思いに駆られる。ネロが、今まで生きてきた意味がこれじゃ無いのではないか。自分も、死ぬばこんな簡単に忘れ去られるんだろうか？ それだけは、嫌だ。折角この世界で生を授かったんだ。何か名を残すような事をしてから死にたい。そうでなければ、惨め過ぎる思いが過ぎよっていく。

この村に居ては何かを残すなんて出来るわけがない。村を出て首都へ行こう。そして、軍に入るんだ。それに、もしかしたらネロの話も見つかるかも知れない。

そう思い立つと、バルクは自分の家へと向かう。家の中にいるはずの父と母に村を出て行くことを話す為に。

あれから、父と母を何とか説得し村を出て行く準備を済ませた。そして、今は村の中で南東に位置する共同墓地へと訪れていた。ここには、村の住民の墓が建てられている。もちろん、ネロやミウにネロ達の両親の墓も建てられている。

バルクは、ミウの墓の前に膝立ちになり目を閉じ手を合わせる。

「(ミウちゃん、俺は村を出るよ。ネロは必ず何処かで生きていると信じている。だから、どんなに時間が掛かるうとも見つけ出す。だから、待っていてくれ)」

墓の前で、ミウに心の中で語りかけると立ち上がる。チラツと、ネロ・エピシミア安らかに眠ると書かれた墓石を見ると、顔を歪ませる。

「（ネロは、生きている！）」

そして、当分過ごす事のない村で夜を過ごし朝になると徒歩でパシニイディへ向かった。

第19話（後書き）

感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に感想板にお書きください

第20話

あれから、カタスについて行き訪れた部屋は、カタスが書類を確認したりする執務室だった。カタスは、そのまま奥にある机へと向かい座る。

「そこに掛けてくれ」

そう言われ指された場所は、カタスとプロドティスの丁度間にあるテーブルと、そのテーブルの左右に設置されたソファアの片方を指してあった。

プロドティスは、そのまま右側のソファアへと腰掛ける。

「すまないが、まだやる事が残っていてね。説明は、仕事をしながららせてもらうよ」

カタスは、そう言うと早速書類を処理し始めた。

「兄上、何故彼らはそのような事を？」

「あの行為の説明の前に、魔法使いがどうやって魔法を発動させているか覚えてるか？」

「ええ。この世界に存在する幼精からマナを借り受け、借りたマナを脳へと取り込む。そして、取り込んだマナを使い、詠唱もしくは魔法陣を描く。此処までの過程を経て、漸く魔法を発動される」

「そう、その通りだ。人が魔法を発動させるには、客観的に発動させる魔法を認識する必要がある。だから皆、詠唱や魔法陣を描くんだ。まあ、殆ど詠唱だけだな。だけど、プロド。お前は、どうやって発動させた？」

「あっ!？」

「恐らく、詠唱も魔法陣も使わずに発動させた。そうだろ？」

「ええ。確かに、その通りでした。しかし、兄上。何故、そのようなことが？」

「分かるのか、か？ その発動方法が出来る存在がこの世に4人存在することになっている。」

そして、その4人の内2人が今此処にいる。私と君だ」

「しかし、兄上。発動方法の仕方が異なるからといって態度が急に変わるような理由が分からないんですが……」

「この世界には、ある伝承があつてな。炎、水、風、土4属性の内1つしか使えない魔法使いの事をエレメントと呼ぶんだが、エレメント同士が殺し合い全滅すればこの世界は新たな世界へと生まれ変わる」

「その様な伝承を彼らは信じているということですか……」

「残念ながら、そういうことだ。だから、お前がエレメントの1人であるということだけで、彼らは敬意を払う。いつか、エレメントが4人揃うとき再生ため自ら命を絶つと思っっているからな」

兄上から、聞かされた話は正直信じられなかった。伝承という不確かなものを彼らは信じているのだ。それは、あの変わりようを見れば何となく分かってしまう。

確かに、話を聞くだけなら今の時代争いばかりみたいで何かに頼りたくなるのも分からなくもない。だからといって、伝承を信じるかと問われると否と思ってしまう。

どうやら、兄上もこの伝承は信じていないみたいだからこそ可能な限り戦争を起こさないよう頑張っていると言っていた。

そろそろ、部屋へと戻ろうと思ひ立ち上がる。立ち上がったとき、ふと疑問に思ったことがあり兄上に問いかける。

「そつえば、兄上。何故、訓練所だと分かつたんですか？」

「ん？ 何、エレメントが力を使うとき、エレメントにはある程度

の場所が分かるみたいだな。そのおかげだな。ただ、いきなりだつたからな焦つたよ」

疑問が解決すると、兄上に部屋に戻ると言つとそのまま執務室を後にする。

第20話（後書き）

感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に感想板にお書きください

第21話(前書き)

2011/11/17 加筆修正

第21話

兄上から、この世界に伝わる伝承を聞いた日から1ヶ月が経った。あの日から、俺がエレメントの1人であるということが、城中に広まったみたいで俺が廊下で兵士や給仕の人達と擦れ違つたたびに頭を下げられる。

俺は、頭を下げられる様な人間じゃないから毎回その行動に困つてしまう。だから、兄上に城の皆に止めて貰えないかと頼みに行ったんだが、諦めて慣れると苦笑されてしまった。

更に、彼らにとつて兄上や俺は、この混沌たる世界を変えてくれる神に選ばれた人間だと信じ込んでいるんだ。そんな彼らなんだ、尊敬のためかどうかは分からないが、そういう行動をするのは致し方ないだろ。それに、別に害はないんだから。とまで、言われてしまえばそのまま何も言わず後ろに下がるしか俺には出来なかった。

それから、あの日。兄上と兵士が話していたフルリオ鉱山付近で見かけたというワイル帝国の兵士だが、どうやら本当だったみたいで兄上が自分の不甲斐無さに嘆いていた。警戒していたというのに、フルリオ鉱山に穴を掘られ、エリピオ王国へと続く道を造られてしまっていたために。

そのため、ワイル帝国の兵士が大量にエリピオへと入り込まれてしまった。兄上は、すぐに軍を派遣し何とか近隣の村に被害を出さずに撃退できたと教えてもらい、今はその穴を塞ぎ同じことが起こらないように、軍の見回りを強化したともその時に言っていた。

この事以外は、特に変わったことは起こらずに俺は城の兵士たちと訓練をしながら、この1ヶ月を過ごしていた。

そして、いつも通り兵士と訓練をしようと部屋を出ようとすると兄上が訪ねてきた。

「プロド、すまない」

「兄上？」

「お前に頼みたいことがある。急ぎ此処から、北北西にパルセノス村へ兵士5名を連れて向かって貰いたい。人選は任せる」

「いつたい何があったんですか？」

「パルセノス村が、魔物に襲われたと報告が来た。兵士によれば、何とか倒すことは出来たらしいが未だに、フルリオ鉱山から魔物が大量発生しているとの事だ」

パルセノス村が、魔物に襲われたと聞いたとき何故か恐怖とも悲しみとも感じられる気持ち心が支配した。そんな状態では、上手くできるわけがない。それに、実戦も経験していないんだ、いきなり大量発生している魔物と戦うとか無理じゃないのかという思いもあり、俺じゃないほうが良いのではと思いその事を言ってみるが、人がいないとの事だった。

それに、今のお前なら大丈夫だと言われてしまう。兄上の言う大丈夫が何に対してなのか分からないが、そう言われれば、頼られていると思う、いつか実戦は経験するんだ。遅いか早いかの違いではないと無理やりにも気持ちを切り替え、折角兄上が俺に頼みに来たんだから頑張ろうって気持ちにする。

そして、兄上にパルセノス村へ行くことを了承すると、剣を渡される。

渡された剣を見ると、その剣の鞘には中央にある丸い物体に、2人の上半身だけを描かれた人間が右手と左手を繋ぎ、手を伸ばしている絵が描かれていた。

第21話（後書き）

感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に感想板にお書きください。

第22話

バルクが村を出て3日。漸く、首都<パシニイデイ>へと着いた。正直、徒歩で来たことには後悔している。村に返せないからって考えて馬を使わなかったのは失敗だった。返せないのならば、饑別にでも貰っておけばよかった、1匹ぐらいなら問題はなかっただろうし。

まあ、それも既に遅いな……時間は掛かったけど、無事に<パシニイデイ>へ着いたんだから。

とりあえず、今は軍に入る方法だ。あそこに向かえば分かるだろうと思いい、バルクは北にある王宮の扉の前にはずの兵士たちを思い浮かべ、北に向かつて歩き出す。

20分程、北に歩き漸く王宮の扉の前へ着く。そこには、やはり兵士2人が立っており王宮に入る者たちを確認する姿があった。バルクは、そんな兵士の1人に近づき軍に入る方法を尋ねる。

「ん？ 入隊希望者が……私について来なさい」

そう言つて、その兵士はもう1人の兵士に持ち場を離れることを話すとそのままバルクを見ることもなく、扉を潜って行く。

その兵士の行動にバルクは、確かに此処にいる兵士に尋ねれば、入る方法は分かるだろうと思つていたがまさかこんなすぐに事が運ぶとは思ひもしなかった。村にいとあまり詳しい情勢などの話を聞くことがない。だから、バルクには入隊希望者は常に募集しているのか、何かしらの状況変化で急遽募集しているのか分からなかった。しかし、バルクにとってすぐに入隊の可能性があるのだから今はそんなことを気にしている意味はないと考え直し、兵士の後ろをついていく。

兵士の後ろについて行くと、通つたことのある道だと気づき兵士が

向かっている場所が分かった。そして、兵士に案内されたのは剣魔術大会の会場だった。そして、今は大会のときにあった土台が撤去され砂地のみという場所で、兵士たちが訓練をしているところであった。

バルクを、案内してきた兵士はここで待つようにバルクに言う。訓練をしている兵士たちの中に紛れていった。そして、5分ぐらい待つと案内をしてくれた兵士が別の兵士を引き連れて戻ってくる。

そして、案内をしてくれた兵士に別の兵士が、頷くと案内をしてくれた兵士が何処かに去って行く。恐らく、持ち場に戻ったのだろうと推測する。そして、残った兵士を見る。身長は、バルクと同じぐらいの180センチ。体型は、鎧を着ているためよく分からないが、太い気がする。顔は、30代ぐらいと感じさせ、左目は斬られた後が残り閉じられている。髪は銀髪で短く切り揃えられていた。その兵士が口を開く。

「初めまして、私はパシニイディ軍第1部隊隊長、ガイス・ジークラン。入隊希望者という事だが……名前を良いかな？」

そう言われ、バルクは名乗った。

「では、早速テストを行うが準備はいいかな？　バルク・スクード君」

「テストって何をするんですか？」

「何、簡単さ。私と戦うだけで良い」

その内容に、なるほどと納得する。当たり前か軍に入るんだからどの程度戦えるか調べるのは。だから、ガイスの言葉に、すぐに頷き返す。

そして、お互いに距離を取りお辞儀をして剣を構える。周りで訓練をしていた兵士たちも訓練を一旦中断すると、テストを見るために

2人の邪魔にならない様に距離を取って円を組み始めた。兵士の円陣による簡易な試合会場が出来上がるのを待っていた訳ではないだろうが、組み終わると同時にバルクはガイスに向かって走り出す。

「はあっ！」

気合を口に出し、ガイスに剣を両手で持ち振り下ろす。しかし、ガイスはバルクの剣を剣の上に掲げ防いだ。バルクも今の攻撃を防がれると分かっていたのかすぐに左から右に薙ぐ攻撃に切り替える。それを、ガイスは冷静に後ろに下がって避けるとすぐに体を横にずらしながらバルクの左側を取ろうと踏み込み、バルクの左肩を切りつける。

その攻撃を察したバルクは、すぐに体をずらしガイスがいる方向へ向け距離を取ろうとするが、少し遅かったらしく顔ぎりぎりの所を剣先が通る。

そして、2人は攻防一体の状況を10分以上続ける。そのため、バルクは所々血を流し、息も上がってきていたがガイスは、鎧に傷は付いていたが、鎧のおかげで血を流すことはなく流れているのは、汗だけであった。更にバルクみたいに息が上がっている様子は感じられない。

そんなガイスが1度笑みを浮かべると、突然構えを解き剣を鞘に戻す。そして、いきなりのガイスの行動に、呆然としながらもバルクは構えを解かずにした。

「バルク・スクード君。これでテストは終わりだ。結果は……君の怪我の治療を終えてから話そうか」

ガイスは、そう言うと周りで見学していた兵士の1人に向かってバルクを医務室に連れて行くよう指示を

出す。

しかし、バルクにはその言葉は聞こえていなかった。呆然としながら、自分の握っている剣を見つめる。何とも不完全燃焼な気持ち悪い状態であった。今も尚、ガイストとの戦いに燃え始め、昂ぶっている心を持って余しつつも、テストは終わったんだと無理やり昂ぶっている心を落ち着かせ剣を鞘に戻す。

そして、バルクを医務室に案内するため待っていた兵士の後ろについて行き医務室へ向かった。

第22話（後書き）

感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に感想板にお書きください

第23話

兄上から、剣を渡されるとすぐに兵士を5人集める為に部屋に兄上を置いて、訓練所へ向かう。今なら、兵士たちは訓練所で訓練を行っている時間帯だから。

しかし、何故いきなりフルリオ鉱山で魔物が大量発生なんて事が起きたんだ？ それに、ワイル帝国の軍がこちらの領土に入ったこともある。この事が、何か大量発生と関係があるのではと考えてしま

う。ただ、いくら人間が魔法という力を使えるといっても魔物を操るような魔法はないはずだ。魔法は……生命を奪うことしかできないはずなんだから。

だから、ワイル帝国の奴らの行動と魔物の大量発生に関連性はないと思っただけだ。今は、パルセノス村、それにフルリオ鉱山へ急ぎ向かう必要がある。

「ザファイ・シグフォールド、クロエ・ルーフォ、アルガー・ファルス、シルバ・ハーネス、エルダ・ユートラス。集まってくれ」

訓練所に入ると、すぐに同行させようと候補に挙げていた5人へと呼びかける。呼びかけると、訓練を中断して5人がプロドティスのいる所へと集まってくる。そして、集まってきた兵士は横に並びプロドティスを見る。

「ザファイ、クロエ、アルガー、シルバ、エルダ。陛下から、至急パルセノス村へ向かうよう頼まれた。俺にとって、初任務だ。手伝ってくれ」

この5人は入隊したばかりという事だったが、ザファイに関しては

魔法も使えるし身体能力も高い。他の4人も魔法は使えないようだが、ザフィ同様身体能力は高い。戦力として連れて行くなら十分だし、何より、こいつ等とはこの1ヶ月可能な限り訓練を一緒に行ってきたし、どう動くかも分かっているつもりだ。だから、一緒に戦場に立つことも安心できる。

「プロド、パルセノスで何が起きた？」

「フルリオ鉱山で、魔物が大量発生。その魔物がパルセノスを襲撃。まあ何とか撃退は出来たそうだが……依然、フルリオ鉱山から魔物の大量発生中との事だ。だから急がなければ、パルセノスが滅ぶかもしれない」

ザフィが俺の事をプロドと呼ぶように、こいつらは他の人達と違って俺の事をエレメントだからといって、呼び方や態度を変えることをしなかった。それだけで、俺は精神的に楽になり安心してやっていける。

「それじゃ、プロドさん。急いでパルセノスへ向かいましょう」

クロエが、そう言ってくるのと皆が頷く。そして、俺は5人に準備のため一旦解散し今から30分後にエリピオの入り口前で合流する旨を伝えて、その場を解散した。

第23話（後書き）

感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に感想板にお書きください。

第24話

バルクは入隊テストを終え、一緒に会場にいた兵士の1人に医務室へ案内される。そして、案内されたのはやはり、以前ネロが倒れたときの医務室だった。

そして、そこに居たのはあの時世話になった、ヤトウロス・ドウトールだった。

「ん？ 確か君は……」

振り向いたヤトウロスが、バルクを見て言ってくる。

「あの時はどうもお世話になりました。バルク、バルク・スクードです。そういうえば、名乗っていませんでしたね」

「はは、そういうえばそうだったね」

そう言って、頭をかく。そして、バルクを椅子に座るように指示を出してヤトウロスはバルクに治療を施す。

治療を施されていると、医務室の扉が開きバルクの入隊テストを行ったガイス・ジークランが入ってきた。

「ヤトウロス、後どれぐらいで治療は終わる？」

「もう少し終わるよ……まあ君がもう少し上手くやっっていれば、もう終わっていたけどね」

「悪かったな、彼が思っていたよりも手強かったからね」

「そうかい、君にそう言わせるとはね。治療、終わったよ」

そう言うとヤトウロスは、笑顔で背中を叩いてくる。その痛みに顔を顰めながらも、ガイスから言われるであろうテストの合否が気に

なり、ガイスに顔を向けた。

ガイスに、顔を向けると向けられた本人は苦笑して、ヤトウロスに向けていた顔をバルクへと向ける。

「合否が気になるのは当たり前か……、パシニイデイ軍第1部隊隊長ガイス・ジークランの名をもつて通達する。バルク・スクード……明日からパシニイデイ軍への参加を命ずる。

そして、当分は私が隊長を勤める第1部隊の配属だ。これから、よろしく頼む」

ガイスから伝えられた言葉に、ホツとして視線を床に落としていると目の前に手を差し伸べられる。その手の先を見ると、ガイスが今までの厳しい表情が嘘の様になり笑顔が浮かべていた。バルクは、その手を取ると、ガイスと同じく笑顔が浮かべこちらこそと言う。

そしてガイスはすぐに、まだ訓練があると言って医務室を後にした。ヤトウロスと2人きりになると、ヤトウロスが入隊おめでとうと言って、机に向かって何か紙に記入し始めた。

第24話（後書き）

感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に感想板にお書きください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3320x/>

Filia 友との約束 改訂版

2011年11月20日13時00分発行